

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第三号  
平成二十九年三月一日発行（抜刷）

遺稿

# 令を講ずる総説

（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）

山田孝雄

# 令を講ずる総説（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）

山 田 孝 雄

## □ 要 旨

本稿は、神宮皇學館大學学長山田孝雄が特別講義のために準備された自筆原稿（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）を翻刻したものである。昭和十八年十二月の学徒出陣において、神宮皇學館大學では十一月二十日に出陣学徒壮行式が催された。これに先立つ同月十五日・十六日の両日、山田孝雄学長より出陣学徒に対して行われた特別講義が「令を講ずることの総説」である。この自筆原稿は、神宮皇學館大學史の一頁を飾る極めて貴重な資料であり、加えて、山田孝雄博士の律令学を考えるに際しても有用なものと思われる。

## □ キーワード

神宮皇學館大學      学徒出陣      律令

## □ 目 次

- ① 緒言
- ② 骨の代の有様とその骨の制の廃絶
- ③ 官職の制の起りて定まるに至るまでの事情
- ④ 令の由来
- ⑤ 現存の令の事情
- ⑥ 令の講究
- ⑦ 令に就いての研究の要領
- ⑧ 令の中唐の制を如何に採用せるか
- ⑨ 令の中に、古制を如何に保存せるか
- ⑩ 令の制のくづれ行くさま

【補記】（大平和典）

（背表紙）

「令を講ずる総説」

（扉）

「令の総説」

令を講ずる総説

十八年十一月十五日 午前十時

〃 十六日 〃 十二時

一、緒言

二、骨の代の有様とその骨の制の廃絶

三、官職の制の起りて定まるに至るまでの事情

四、令の由来

五、現存の令の事情

六、令の講究

七、令に就いての研究の要領

八、令の制のくづれ行くさま

## 令を講ずる総説

### ① 緒 言

一 令を講ずるは単にその令そのものの如何を知らむとするに止まらず、如何にしてこの令の生ぜしか、又令が如何なる精神を保てるか、又その令が古来の制度を如何に改めしか、又古来の制度を如何に保存せしか、更にその令が後に改められ、又は実行せられずなりしは如何なる事情と理由とによりしか等を見究めむことを企て、それと同時にそれらの由来と、それらの原因と結果とを覩て以て本邦の制度の根本義を知らむことを企つるにありとす。

二 こゝに、令を講ずるについて、先づ大御国の大政の行はれ来つる跡を顧みて、その変遷のあらましを説かざるべからず。令はその性質として、もとより大政奉行の道を示すものなればなり。国体は永遠に動きことはいふをまたず。この国体を基としての国家の行動は時の勢を制したまひ、世の状に応じて導きたまはむが為に、それ〴〵宜しきを制せられざるべからざるが故に、法制は時世のさまにつれて、多少の変遷を生じ、時世の急変につれては急劇なる変化をも生ずることあり。令の制定の如きもの時勢の著しき變動に伴ひて生じ、同時にその著しき變動の結果の概要をば今に知らしむるものなりとす。

三 大日本の古今の大勢は大凡四回の變動によりて今日に及べりと思はる。嘉永元年に和歌山藩の士伊達千広の著せる大勢三転考といふ書あり。これは開闢以来徳川幕府執政の時までに、国家の大勢は三転せりといふなり。即ち骨の代、職の代、名の代の三を以て、その三転の代の名とせるなり。この事は大略に於いて達識の見なりといふべきなり。明治廿一年に小中村義象は大政三遷史といふ書を著して、国家の古来の大政は大化改新、建武中興、明治維新の三の大革新を経たりと論ぜり。これは天皇親政の大義を主としたるものにして亦妥当の見なりといはざるべからざるが、今はこれらを一々細かに批評すべき余裕なし。次には先づ、大勢三転考の要旨を説くべし。

伊達千広の嘉永元年に著したる大勢三転考は小冊子なれども一代の大著述なり。その主旨は本邦古来の国家の大勢の三転せることを説けるなり。その三転とはこの書の序として福羽美静のいへる言に

こゝに紀伊国伊達の千広の著述せる大勢三転考をみるに、まづ皇国上古の制、其屍によりて其職をつとめしよりして、中古官制のさまを論じ、又武臣執政の世となりしまでのことをしるせり。この書実に其の大勢の三転せることを詳かにして沿革をしの捷徑といふべし。おもふに、人この書によりて大勢の運転をつまびらかにし、しかしてのち方今王政の復古せる義、

万機の一新せる理を明瞭にし、おの／＼盛世の時事をはげまば、其人とうまれ出し職をつくすに足りぬべからん。

とあるにて、その有益なる言たるを見るべし。

ここにいふ三転は福羽美静の言にて略知らるべき、著者はその冒頭に

掛巻は畏かれども、言巻は恐れかれども、白禰原宮に始国知食し大御代ゆ今のをつゝの盛の御世にいたるまで皇国の有状大に変わることに三たびになんありける。其三転のありかたをいはず、一つには加婆祢、二つには都加佐、三つには名になんありける。かれ上ッ代はかばねもて世を知しめし、中ッ代はつかさもて世を政ち、下ッ代は名もて世を治め賜ひけり。かく変り来し状を考るに自ら時の勢につれてしか移来れるもの也けり。

と説けり。

## ② 骨の代の有様とその骨の制の廃絶

三転考に骨の代のとして説けるは太古よりして、推古天皇の御世までを主としていへるにて、先づそのかばねの制を説きて、

先上ッ代の加婆祢てふことは、自なる皇国の制度にして、外国の制度に無き事なれば、文字も姓の字など当たれど当りがたく、職の如くにして職にもあらず、名の如くにして名にもあらぬ制度にはありけり。

といひ、「かばね」の意義を説きては

その加婆祢てふ語意をいかにと考るに、姓氏録に、氏骨とある骨の字の義なるべし。崇名との説もあれどいと骨は凡人倫をはじめ生としけるものののみならず、器物の上にもいへる事にて、扇骨・鞍骨など肉も皮もみなこの骨を本とし、

成て身となるがごとく、この加婆祢も同じ義にて、そは鳥取部と云ふ一部ありて、其を主り率ひて仕奉るを鳥取造といふ、その造なん一部の根本にして支体にとりては骨のごとくなん有ける。かの草木の根を株といふも同じ語

意なり。今の代にも一組を株といふ事ありて、そは同心株・問屋株の類なり。これすなはち骨の義にちかし。

といひ、又氏と骨との関係につきては

よりて考ふるに、氏てふ言は生血の義にて血脈の流を称ふる言、加婆祢は骨にて一部を統る言なるべし。氏は血脈に附たる唱なれば同血脈の外に唱る事なく、骨は其部によれる唱なれば諸氏にわたりて呼来れり。そは紀氏は紀氏、物部氏は物部氏にして、其すぢに限りて唱へ、骨は紀氏も臣、出雲氏も臣と、なへ、物部も大伴も皆連と唱ふるがごとし。【頭書】血族団体の組織上の名目かくあるを当然とす。】そも／＼この氏と骨の二くさは、人の身にとりて本とも本たる極なれば、支体にならひて血とも骨ともて称たるはさる事ならずや。続紀に「根加婆祢改給比」など根てふ言を添ても云るは殊に親しく聞ゆ。又姓の字を書ことは古く紀記にもに出たれど、此字は当る処もあり、あたらぬ処もありて、そはもと漢国に此かばねてふことはかつてなきことなれば親しく当べき字なければなり。此弁は古事記伝に委しく説かれたれば更にいはず。されば仮字とおもふ骨の字は正字にして中々に姓の字なん仮字には有ける。さるをふるく姓の字を書れたるは大方はこの字にて当る処もあるうへ骨の字はゆゑ、しきかたにも見へく笏、音忽なるを忌てさく訓るをもおもへ。はた、よろづ漢様に物せらるゝ手ぶりなれば、つひに姓の字を当られたるにぞありけん。然れどもとあたりがたき字なる故に源平をも姓といひ、朝臣・宿祢をも姓といふごとく紛はしき事とはなりにけり

といへり。おもふに血族によりての団結の組織としては統括の上に用ゐる名目としてはかく生血といひ、骨といふ如く、生き生くる肉身の上の名を用ゐることは誠に当然にして、これはた直ちに、そが血族上の関係を明確に示せるものとして必然の事なりしなるべし。

さて、それらの骨にも種々の事情あることを明かにせむとして説きて曰はくさてこの鳥取造のごとく一部をあどもひて仕奉るは、いづれも／＼同じ状な

れど、其中にも又種々あり

といひて、

鳥取造 (日本書紀垂仁二十三年紀) (古事記垂仁卷鳥取部ノ名アリ)

土師臣 (〃 三十二年紀) (〃 土師部ノ名アリ)

をあげて

々々などの比類<sup>タビヒ</sup>皆功<sup>イササ</sup>によりて賜へるなり

といひ、又

また始に出せる神武の御代なる倭国造・猛田県主などのごときは功につきて土地を賜ひ、やがて其地を領て仕奉るをもて骨となれり。

といひ、さてこれらを統べて

この居地と行事とのふたつより種々の骨は出来にける也

といひて、骨の起原はこゝにあるを明かにし、更にその氏々の相続くさまを骨の名の相続くことによりて説明して

かくて右のくさくさの骨は其首長の子も孫も兄弟も皆其家にて、首たる限りは国造とも、県主とも、君とも、臣とも、継々たゝへ来りて仕奉れば、加婆<sup>カハ</sup>称は一本の枝の指広<sup>ササ</sup>これごとく、つきて又其部々は青葉の茂り合<sup>アヒ</sup>ごとく、ともに蕃息<sup>ツマハ</sup>りて継々動なく仕奉りこしものなり

といひたり。かくて成務天皇の御世に大國小国を分ち、造長、稻置、県主等宗<sup>ムネ</sup>とあるものは楯矛<sup>シシ</sup>を御表として賜はりたることを叙して曰はく、

さてかく、其長どもに御表をも賜はり、其事を任し賜へるを見ては、後世の官職とは異なり。そをいかにといふに、官職は其人につきて文官にも、武官にも、京官にも、外任にも任じたまひて子孫に及ばず。骨は其家につきて国県を治むるにも、自余の行事につきたるにも、皆其家々の業にして世々に動かず仕奉れば、かの職の進退予奪常なきとはいたく異なり。故前にいへる如く、大御命もて国県を定め、首長をも立賜へれど、猶其土地は己が物にて官

職の代の封戸・職田と同じからず。されば土地は朝廷にも甚しく愛賜へるなり。

といひ、なほ注して曰はく、

此条よくせずは惑ひぬべし。さるは上より任し賜へるものなれば与んも奪はむも朝廷のまにくなる事なれば封戸・職田も同じさまなりと思ふれどさにあらず。其は今の代の大小名の国地を見よ。其遠祖より領得られて、其臣其氏を率從て仕まつるなれば、たやすく与奪あるべくもあらず。骨のさまも是と同じ。

と。さて又田部・屯倉について曰はく、

田部・屯倉ははやく景行の五十六年に「令<sup>二</sup>諸国<sup>一</sup>興<sup>二</sup>田部屯倉<sup>一</sup>」と見えたるを始として、継々こゝかしこに立られたる事見えれば、本文に云る如く、土地を乏しくは思はずまじき理りなれど、既に右に引る伊甚国造稚子直<sup>ワカゴノ</sup>が罪を購ふに伊甚屯倉を奉り、又古事記に、都夫良意富美が訶良比売に五処之屯宅を副て献らんと申し、事もありて、皆己が領たる地と見えたり。故考るに屯倉は公の稲を貯置く御倉、田部は公の田を作る部なるものから、其御倉ある地も各々領たるものなり。

といひ、又御名代・御子代について曰はく、

また御名代・御子代の行れしも骨の代の手ぶりぞかし。そはまづ御名代といふも御子代といふも、事は同じくして、天皇・皇后に皇子まします、或は皇子達に御子ましますまぬ時は其御名を後世に伝へ賜はむとて入部を定らる、なり。

といひて、古事記垂仁卷に皇子伊登志和氣王の子代として伊登志部を定め賜ひしことを初として、日本書紀景行卷に日本武尊の為に武部を定め賜ひしこと、同書仁德卷に大兄ノ去来稻別皇子の為に壬生部を定め賜ひ、皇后の為に葛城部を定め賜ひしこと、又古事記仁德卷にはこの外に水齒別命の御名代として蜷部、大日下王の御名代大日下部、若日下王の御名代若日下部を定められしこと、日本書紀允



恭卷に皇后の為に刑部を定め賜ひ、衣通郎姫の為に藤原部を定め賜ひしことをあげ、天皇の御上には清寧天皇は御子ましまさぬによりて白髪部舍人、白髪部膳夫、白髪部輶負を諸国におかれ、武烈天皇の御子代として小泊瀬舍人を置かれたる事、安閑天皇紀に皇后・次妃の為に屯倉之地を建立せられしこと等を記して曰はく、

是らみな大御名の絶む事を悲しみ慨み賜ひて万代に朽ず伝へ給はん事をおもはせるより起れるなれど、しかいとせめて悲しくおもはせる事をこの御名代の定にて御心安く思はしたるも、もはら骨の代の勢にして、其故いかにといはん、条々説来れるごとく、国にも県にも一部々々この屯党ありて、其部を統る首長はいはゆる骨にして、世々に動きなく継行ものなれば、一つの地を定め、一つの部を立られんには、誠に万代に移り変わるまじくおもほしめせば、さしも恐き大御名の上にかけて、御嗣まさる御代りにかゝる詔も出来るにて、贈位贈官行はる、官職の代と異なる状を考知べし。

といへり。さて雄略の御代の次より同じ骨の世も多少変遷を生じたれば叙して曰はく、

かく加婆祢もて代を治め賜へる故に、雄略の御代の比よりは御史にも諸司百官を惣挙るを、臣、連、伴造、国造とは云るなり。伴造・国造をたゞ二造とも敏達紀には云へり此称の事は古事記伝にも所々に弁られて更に説くべくもあらねど、もと骨の代の論なれば更にいはざる事をえず。故記伝の説をも引出て再びこゝに弁ふなり。記伝四十ノに云、「臣連とつらね云は大凡そ諸の氏々の中に臣と連とは、京近く住居スミて殊に親近シタクシく朝廷に仕奉る人等なり。故レ古ヘに仕奉る人等を総スベて都鄙ミヤビを広く云ときは臣、連、伴ノ造、国ノ造と云ヒ、諸国クニまでは及ばぬには臣連と云り」と見えたり。此説さる事ながら、尽さざるに似たり。いかにと云に、京近く住て殊に親しく仕奉る氏人、必この臣連の二骨に限れるならず。又諸国に此骨あればたゞ親近く仕奉るとのみにあらず。今按ずるに、こは大伴、物部、紀氏などの骨にして、代々御政を執申、功高く族広き骨な

るうへ、雄略の御代に大臣・大連を並置れしよりかくはた、へたるものならんか。同御代の紀に「以三平群臣真鳥ニ為三大臣。以三大伴連室屋・物部連目ニ為三大連。」と見えてもとより貴きが上に、今又きはやかに、諸臣の上にたし賜へれば、諸の氏々を惣挙るに臣連もて呼れしも理りならずや。又考るに、古事記に、都夫良意富美が雄略天皇に奏奉りしことばに、臣連といへることもありて、そはこの大臣・大連を置れしより前の事なれば、この大臣・大連を置れしよりのことにはあらで、継々弥栄えにさかえきにける二骨カネなれば、後の世姓ノ氏さはなる中に源平藤橘とた、へいふごとく、自の勢もて世に此二骨をもて諸臣を統云ひしにもやあらん。今そのけぢめは知べきならねど臣連と並云事はこの御代の比とおもはるゝなり。其証はこゆ上ツ代にかくならべいへる事なければなり。記伝にこの称の事を論ひて「書紀雄略卷より持統まで、卷々に多く見えたれど、上ツ代の卷々には却てこの称の見えざるは漢様に改め書れたるものなり。」といはれたるは中々に誤ならん。此より以前サキにはこの称なかりしかば百僚群卿など大凡にかゝれたるぞかへりて実事になれり。といふべし。然らずしてひたぶる漢マさまに改められんには雄略以後も同じ事にて、上代は殊に漢めかし。この御代より古言にたちかへらるべき理あらんや。

といへるが、この言は首肯すべし。かくて、大臣の名は雄略天皇の御代にはじまれるにあらずして成務天皇の御世に武内宿祢を大臣と為されしこと日本書紀にも古事記にも同じ様に見ゆるをあけて、

これ臣の骨の大臣と称られし始なり。こは此大臣世に比類なく、忠心明く、功勲高かりければ、特に尊み賜ひて八十氏人の上に立せ賜へるなり。

といひ、さてその子孫の栄えを叙して

この雄略の御代、真鳥臣を大臣となされしより、此氏人のみ大臣となりしも自らなる勢ヒなり。

といひ、大連につきては垂仁二十六年に物部十千根大連とあるを始めとして、その後にも見えたるもあれど、いづれも正確ならずとして、

とまれ、かくまれ、雄略の御代室屋と目の両連を大連と為賜へるは正しく大御詔もて任賜へるなれば、これを疑べくも非ず。

といひ、さて、

か、れば臣連をもて諸臣を統云事はこの雄略の御代より起れること、こそはおもほゆれ。

といへり。次には伴造、国造につきて云はく、

伴造・国造の事は条々いへるが如く、伴とは一部を云る称にていはゆる鳥取部・三枝部の類<sup>トモ</sup>是也。其部を統掌<sup>トモ</sup>るを伴造と云。

といひ、又雄略十六年の詔、欽明紀に大藏掾<sup>ミヤリト</sup>を以て秦伴造と為すとあるをあげてさて曰はく、

其一部々々司る者を伴造と云。是職の代の長官、今の代の頭支配と同<sup>ジ</sup>さまながら、職の長官は其職掌其身にとまりて転任し、骨は其家つきて継々仕奉るものなれば、其趣異なる事条々いへるごとし。次に国造は条々説来れるごとし。

といへり。

以上骨の制度の大略を説けり。ここにこの骨の制度が官職の制度と代れること、これ皇国政治上の大変革なり。かゝる大変革が如何にして生じたるかは今いはず。これが何時起りたるかといふに、大勢三転考は曰はく、

さて加婆祢の代は大むね条々説来れるごとくにして、御世々々を経しに、推古の御代に至て始て冠位の制出来れり。同紀十一年十二月に云。「始行<sup>ニ</sup>冠位。大徳、小徳、大仁、小仁、大礼、小礼、大信、小信、大義、小義、大智、小智、并十二階。並以三当色絶縫之。頂<sup>ニハ</sup>撮<sup>トリ</sup>総<sup>スベテ</sup>如<sup>レ</sup>囊<sup>ニ</sup>而着<sup>レ</sup>縁<sup>ニ</sup>焉。唯元日着<sup>ニ</sup>髻<sup>ツヅ</sup>華。」と見え、つゞきて十二年正月に、「始賜<sup>ニ</sup>冠位<sup>ニ</sup>於諸臣<sup>ニ</sup>各<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>差<sup>ス</sup>

と見えたり。この時皇太子みづから十七条の憲法さへ作り定賜ふにいたれり。是なむ皇国の大制一変して白檮原御代に始国しろしめし賜ひてより継こし氏々の骨の手ぶり官職に移りかはる始には有ける。かの憲法の十二条に「国司・国造勿<sup>ヲサズ</sup>斂<sup>ニ</sup>百姓<sup>ト</sup>。国非<sup>ニ</sup>二君<sup>ト</sup>一民無<sup>ニ</sup>三兩君<sup>ト</sup>。率土兆民以<sup>レ</sup>王<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>王<sup>ト</sup>。所<sup>レ</sup>任官司、皆是王臣。何敢与<sup>レ</sup>公賦<sup>ヲサトラム</sup>斂<sup>ニ</sup>百姓<sup>ト</sup>。」と見えたるなど、骨の手ぶりの失を破りて大制度を建賜へるなり。かくて孝徳の御代、くさぐさの大改革ありけるも、此御制を基本と申べき也。

といへるが、げにもこの時にこの事は始まれるなり。かくて、かゝる大改革の生じたるにつきては、

今此御代に至り、始て冠位を行ひ、憲法をもたてられたる次第をうましに考見よ。いとく上りたる代は人も素直に何事も大らかには有けん。継々国広く、人衆く、世の手ぶり盛に成くれば、かならず厳しき御制なくては治賜ふ事かたかるべし。此皇太子をひたぶる仏法に泥み賜ふとてかにかくに論ひ奉るめれど、猶深く考みよ。当時かゝる大制度を建立し賜ひて、国民父母のごとくかしこみ仰ぎ奉りしはすぐれたるが上にすぐれたまへる聖徳満足し賜にあらずはいかでか此大事を成賜はん。

といへり。これは時勢の然らしむる所と、聖徳太子の大決心によりてこの事を行はれたることを説けるにて、然るべく思はる。しかも、それが実現するは容易の事にはあらざりしなり。三転考は曰はく、

さてこゝに国司・国造と並び立たれば、この時国司をも置れたる如くなれど、国司は孝徳の御代に置れたることにてこゝは大凡国県につきたる骨をさしていへるものにて、この憲法の条々にはかく立られにたれど、いまだ行れざる事もありと見るべし。されば二十年、皇太夫人の誄にも「令<sup>レ</sup>誄<sup>ニ</sup>氏姓之本<sup>ト</sup>」と見え、二十八年に記録を撰賜へるにも「臣、連、伴造、国造、百八十部并公民等本記」など見えたり。

と。まことにこの言の如く遽かに行はれずなほ大体旧態は存したりしならむ。但し、ここに国司に就きていへることはそのまゝに賛成しかねたり。日本書紀仁德天皇六十二年の条に遠江国司の表もて上言せる由の記事あり、清寧天皇二年の際に播磨国司の名あり、而して古事記にはこの播磨国司をば「針間国之宰」とかきたるがこれは「ハリマノクニノミコトモチ」とよみ来れり。おもふにこの国司は国造等土着の氏族にはあらずして大命を奉じてその国に遣されしものならむか。然りとせば、ここに国司といふ一種の職掌はやく生じたりしをば憲法にもそれをあげたまひしにあらじか。されど今委しく之を論ずべき時にあらねば、略せむ。さてその大改革は推古天皇の朝に端を發し、孝德天皇の御世に至りて一往成立せしものなり。三転考は曰はく、

既に舒明・皇極二御代を経、孝德の御代に至りて天下の大制大に變りて骨の代、職の代と革れる状は、先この御代元年に「即祚日、以阿部内麻呂臣<sup>一</sup>為左大臣<sup>一</sup>、蘇我倉山田石川麻呂臣<sup>一</sup>為右大臣<sup>一</sup>、以大錦冠<sup>一</sup>授中臣鎌子連<sup>一</sup>、為内臣<sup>一</sup>、増封若干戸<sup>一</sup>云々」、これ官職の始元にして、こゆ上ツ代の大臣・大連、左右の大臣と革賜へるなり。大臣の調、骨にてはおほみなる事云も更なり。此、の左右大臣はおほいもうききと訓べき歟。さるは骨と職のけぢめあればなり。同じ八月に、「丙申朔庚子、拜東国等国司。仍詔曰、隨天神之所奉寄<sup>一</sup>方今始將修<sup>一</sup>万国<sup>一</sup>。」この詔に始とある、眼をつくべきなり。実「凡国家神武以来の大勢こゝに至りて一變せり。」「<sup>アイトアル</sup>所有公民、大<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>領人衆<sup>一</sup>、汝等、之<sup>レ</sup>任<sup>一</sup>皆作<sup>ニ</sup>戸籍<sup>一</sup>及校<sup>ニ</sup>田畝<sup>一</sup>。其<sup>一</sup>蘭池水陸之利<sup>一</sup>与<sup>ニ</sup>百姓<sup>一</sup>俱<sup>ニ</sup>セヨ<sup>一</sup>」、かく制られたるはこゆ前代は皆骨なれば、自がじ、国々所々を領て戸数・田数など細かに朝廷には知食ざりしなるべし。そを今、天の下の土地を尽く公田と定めて、たゞしき制度と改らるゝときなれば、かく戸数・田数を作らしめ賜へるなり。さればかの憲法に「率土兆民以<sup>レ</sup>王為<sup>レ</sup>王。所<sup>レ</sup>任官司、皆是王臣。何敢与<sup>レ</sup>公賦<sup>一</sup>斂<sup>ニ</sup>百姓<sup>一</sup>。」とある条のつひに業に行れたるもの也。

といひ、又従来の豪族の専恣を停めしめ賜へる数々の詔をあげて説きさて曰はく、

かの臣連・二造の輩、自がじ、人民土地をうしはき、心のまに／＼事を執行しはいとあるまじきわざながら、上代かばねの手ぶり、世々へて自らかゝるさまなりけん。さるは標<sup>アラ</sup>代民<sup>ミヨ</sup>とあるは御名代の事にて、白髮部・穴穗部の類なり。さて其部を置れし時、臣まれ、連まれ、これが部長たる人ありて、そを司どりしなり。もとより此御名代は後の世に御名の残らんが為なれば、其長はとこしへに其部党を率ひて仕奉るものにしあれば、この詔に見えたる国県山海等を割て領<sup>ウシ</sup>き、其租税を収めて宮殿園陵の修治をはじめ万の公事を仕奉れるなん、則骨のさまなる。然はあれど法久して費多き習なれば、種々専縦なる業も多く百姓の苦む事も少からざりけん。さればこの詔のごとく或は争ひ、あるは兼并など、上の為にも下の為にも害のみにてかくきため賜はでは得あるまじき勢なり。

といひ、かくて又二年正月の改新之詔をあげ、次に皇太子が奏して入部五百二十四口、屯倉一百八十一所を献ぜられたるを叙してさて曰はく、

元年九月御名代の臣連・二造等が、其土地を領て心の順々<sup>マニク</sup>ものする事を禁られて後、此時にいたりて尽く罷られたる也。

といひ、かくてなほ説く所ありて、この改新の行はれたる所以を説きて曰はく、されば骨は上ツ代の手ぶり、官職は唐ざまをうつされたるものにて、皇国の古制廢れたるは口をしきやうにも思ふめれど、つらく／＼考るに、時勢の遷變る事は天地の自なる理なるか。または神の御はからひなるか。凡慮の測しるべきならねど、畢竟人の智にも人の力にも及ぶべき事ならず。然して五百年ばかりの世をふる時は自ら遷變るべき運数来りて、其時に当りて世にすぐれたる人出来て、此氣運に乗じて大事を成就するものと見えたり。和漢今昔貫通して考るに皆さる勢<sup>セ</sup>なりけり。

といへり。さてその大化の改新も始めは容易ならざりしが、次第々々に実行にうつされて天武天皇の御世に至りて骨の廢れたることをいへり。さて三年四月にそ



の新政の趣旨を諭されし詔をあげて次に曰はく、

かくて冠位はこの十二月に七色十三階之冠を制られしより次々制改られし事は職の条に云がごとし。此御代かくのごとく、骨の手ぶりを改られて、八省百官を置、法度・律令施行せられてより後、天武の御代十三年にいたりて遂に骨は廢れにけり。

といひ、それを説明して曰はく、

そは同年十月朔の詔曰、「更改<sup>ニ</sup>諸氏之族姓<sup>一</sup>作<sup>ニ</sup>八色之姓<sup>一</sup>、以混<sup>ニ</sup>天下万姓<sup>一</sup>。

一日真人、二日朝臣、三日宿祢、四日忌寸、五日道師、六日臣、七日連、八日稻置。」かく定られて、諸氏に此新姓を賜れる事、紀に見えたるが如し。さてこの加婆祢、真人をもて最上とせられて皇族の加婆祢となれるは瀛真人の御名によれるもの歟。また道師と云るは画師・葉師の類をいへるなり。抑臣連は上古よりの貴族にして雄略の御代、大臣・大連を置れ、諸氏を統るにも臣連とたゝへられし骨なれば、いまは八色に定めらるゝも真人にさしつゝきては臣連なるべきを新に朝臣・宿祢などを置れ、物こそあれ、道師の下にこの両かばねを置れたるはめさむるばかりの事にして、容易からぬ御制なりけり。

といへり。この説大体従ふべし。但し、真人を一階とせられたることの説は従ひがたし。西高辻男爵家に蔵する翰苑第三十卷（唐の張楚金の著）に倭国の事を叙せるのちに括地志の文を引けるあり。その括地志の文の中に、

倭国、其官有二十二等一。

とありて、推古天皇朝の官位十二階をあげたるが、それには

一曰摩卑兜吉寐、華言大德。

とあり。されば、真人といふは古くより貴人といふ意なりしことならむ。さらば天武天皇の御名もとよりこの「まひと」といふ語によられしならむか。さてこの改新の行はれたることに就いて曰はく、

そを深く考るに、諸の骨ども、白檮原に始国しらし、時ゆ、世々に継こし物から、かの蘇我氏の威勢強く、奢らひ誇りて、蝦夷・入鹿等に至りて凡けなき振舞ありしかば、天智天皇、鎌足大臣と深く謀りごち給ひて誅なひ賜ふ。此時かの唐制もや、くく染来りて、かれが官職の制度はこれの骨の世々に動なきとはうらうへにて、よきをあげ、あしきを退け、凡下の者も高に昇り、貴族といへども下に貶す。また国々土地は皆国司・郡司もて治賜へば、今迄の骨の威權を折き賜はんには是にしくものなく、さてなん孝徳の御代種々の御制出て、骨の手ぶりを改賜へるより後は、もはら官職の制なるに、更にまた八色もて万姓を混賜ふとあるは、さこそいへ、上古より蕃茂り來し骨なれば、公の御制こそは改賜ひにたれ、私には猶、其骨の手ぶり俄に止べくも非ず、はた臣連などの貴族は俄に勢失ふべくもあらずして、とにかく新なる職のかたには心寄ざりけん。かれ今種々の骨を纔に八くさに混め賜ふのみかは、さしも貴き臣連を無下に落し賜へるは、骨てふものを有名無実と為賜へる英断ミハロウヂにして、やがて今までの臣連等の貴族には、或は朝臣、あるは宿祢として貴き姓を賜へれど、是より骨の実ミは失て、かざしの花と成たるなり。

と説き、さて結論して曰はく、

こをもて深く考れば、全く臣連等威權をくじきて新制度をたてられん為とこそは思はるれ。かゝれば官職は上宮の御法に起りて、骨は淨御原の御代に廢れたりと云べきなり。

と。まことに骨の制の代のさまかくの如くになり、かくの如くにして改まり、かくの如くにして骨の制はその精神を失へりといふべし。かくて起れる官職の制の骨子を示せるものは、令そのものなりとす。

### ③ 官職の制の起りて定まるに至るまでの事情

按ずるに官職の制の起るに至りしことは前条に略説ける所なり。されど、彼は骨の制の改まるに至りしことを主として述べたる所なれば、ここにはなほ他の方面の事情を顧みることとせむ。この制の起るに至りしものは誠に三転考の言へる如くに内には臣連などの豪族の専横の甚しきものありて、これを根本的に改むることを必要とせしならむ。今この事に就きては坂本太郎氏等の研究ありて一々之を説くを要せざるべきが、かの仏教の渡来を機因として、朝廷に崇仏と排仏の二党を生じたるが、これは仏教を信ずると斥くるとの二大別を呈するものなれど、その内実を見れば、二者共に之を口実として政權の争奪をなせりと思はる、状態にあり、かくて、中臣・物部二氏は仏を斥け、蘇我氏は仏を奉ずるを主張し、その党争の結果、物部氏は亡び、中臣氏は屏息し、蘇我氏ひとり跋扈し、ここに皇權をも侵さむとするに及びて、皇極天皇の御世に及び蘇我氏は族滅せられたるなり。今、先にいへる大臣・大連の制を見るに、崇峻天皇の御世までは大臣・大連並びて大政を輔翼し奉りしかど、この御世に大連物部守屋亡びて後は大連といふものの再び置かる、ことなく、たゞ蘇我氏のみ大臣として大政を輔翼し奉ることとなれり。かくて馬子が大臣たること五十四年、その専ら國權を執れること、崇峻、推古兩朝に至りて四十年、その子蝦夷繼ぎて大臣として専ら國權をとること二十年、馬子・蝦夷を通じて大臣のみにて國權を専らにすること通じて五十九年、かくて、その専横皇威を厭せんとするに至りてここに族滅せられたるなり。この豪族の專權はその實力即ち土地・人民を擁するにあれば、これを根本的に滅したる後、再びかゝる弊無からしめんとせられたること、これ大化改新の直接の動因たりしならむが、單に豪族の兼拝を根絶せむとしては他にも或はとるべき方法無しとはいはれざらむ。されば、この官職の制度の採用はこの事情のみによれりとは見えず。

今、この改革にあたりて採用せられたる制度を見るに、主として唐の制度を模

楷とせられたることは今更いふをまたず、然らばそれは如何にして採用せらる、に至りしか。惟ふに、これは三転考に既にいふ如く、推古天皇の御代に冠位十二階を定め聖德太子が憲法十七条を作られしことによりて既に明かなるを明るべし。かくて推古天皇の十五年に小野妹子を隋に遣はされしことはこれ求むる所ありての事なるは推量に難しとせず。この隋に遣はされたる使はこの十五年より二十二年まで八年の間に三回ありしなるが、一往復に略一ヶ年を要したるものなれば、頻繁に正使を遣はされしことを想ふべし。この遣隋使は一面支那より仏教を直接に学ばむとするにあり。一面は支那の文物を移植するに在りしなり。それ故に学生・學問僧の使節と共に往きて留學し學業成りて歸朝したるもの頗る多かりしなり。さて推古天皇の三十一年に歸朝せし大唐學問者医惠日共に奏聞して曰はく、

留<sub>リウ</sub>于唐<sub>テ</sub>國<sub>ニ</sub>學者、皆學<sub>テ</sub>以成<sub>セリ</sub>業<sub>ニ</sub>。応<sub>レ</sub>喚<sub>ル</sub>。且其<sub>レ</sub>大唐國者法式備<sub>ハリ</sub>定<sub>マル</sub>珍<sub>ニ</sub>國<sub>也</sub>。常<sub>ニ</sub>須<sub>レ</sub>達<sub>カヨ</sub>。

と。これより先、二十六年に隋亡びて唐興りたるが故に、ここに大唐といへるなるが、その隋唐の興亡の際にして世靜かならざりしが故に正使の派遣は姑く中絶せるならむ。これより後七年、舒明天皇の二年に第一回の遣唐使あり。かくて天智天皇の御宇八年に至るまで、四十年の間に八回の交通ありしなり。按ずるに、これらの遣唐使、又遣唐留學生等はこの官職制度の確立に關して直接間接に参与せしものならむ。ことに、蘇我氏誅滅の元勲中臣鎌子は、後天智天皇となられし中大兄皇子と共に周孔之教を南淵先生の許に学ばれし由なるが、この人は推古天皇十六年に留學したる八人の學生のうちの一人南淵漢人請安その人なり。さて又孝德天皇即位の初めに國博士と為されし沙門旻法師、高向史玄理も亦上にいへる八人の留學生のうちの一人なり。即ちこれら隋唐に学びたる學生等のこの大化の改制にあたりて、深く参与したりしことを知るべきなり。

かくの如く隋唐の制を手本として改制せられたることは今や疑ふべからざる

が、国内の事情のみを以て直ちに隋唐の制を採用せらるべき理由なりとは断言しうべからず。かくの如く隋唐の制を採用せられむにはその前にあたりて支那制度に関する智識のその予備をなすものとして存せざるべからず。然らばざる予備の智識ありやと考ふるに、これには一は海外の附属国新羅・百濟等より間接に伝へたる智識もあるべく、三韓人・支那人の帰化せしもの、及びそれらの子孫の伝へたる智識もありしなるべし。而してかの蘇我氏の如きはその帰化人の子孫を盛んに利用せしものの如し。かの馬子が崇峻天皇に対して畏多き事を行はしめたる東漢直駒にあらずや。倭漢直は応神天皇の御宇に帰化せし阿知使主の子孫にして、伝へて後漢靈帝の子孫と云へり。阿知使主の子都加使主、この人は雄略天皇紀に東漢直駒<sup>ツツカ</sup>とあると同じ人か否か、或はその子か孫かならむ。この東漢直駒は雄略天皇の御信任篤かりしものと見え、大伴大連室屋に詔して、東漢直駒に命じて、新漢人を処理せしめられしことあり。又崩御に臨みて、大伴室屋大連と東漢直駒とに遺詔あらせられし由見え、その遺詔に基づきて二人力を合せて清寧天皇の御即位を確立し奉れることあり。崇峻天皇の時よりこの漢直は専ら蘇我氏の仇牙となりしことは蘇我氏滅亡の記事にて知る。更に又秦始皇の後といふ秦氏あり。外蕃の氏族の文筆又文物を以て奉仕せしもの蓋し少からざりしならむ。これらの智識を仏教と共に輸入せられし新智識とが、思想上、当時中華と誇称したりし支那の文化にあこがれたりしこと無かりきといふべからざるものありしならむ。

かくの如く国内の政治上の事情は早晩一大革新を行はざるべからざる勢を呈し、又智識と思想との上に於いて支那の事を盛んに学びつゝ、ありし事情とに照すときは、この革新は必然的の事の如くなれど、この革新をば、その文化の移植とのみはいふこと能はざるものありしならむ。惟ふに、我が国は神功皇后の御時に三韓の帰服してより朝貢怠らざりしかど、雄略天皇の頃より反覆常ならずして、朝廷その征討に勞し、欽明天皇の御宇には新羅遂に任那の日本府を亡したれば、之を恢復せむことに尔来天皇の大御心を勞せらるること世々相繼がれたれど、それ

を遂ぐることはせずして国家まことに内外多事の日を送られたり。かくて又唐起りてより新羅は陽に本朝に恭順し陰に唐と携へて半島に於ける本朝の勢力を妨げむとして、外国の事日に非なりしことなれば、国力を挽回せむが為にはここに非常の手段に出でざるべからざるものありしならむか。

ここに於いて、その当面の目標は主として支那にありしことは明かなり。かくて大革新を行はむとして、その模範を何に求むべきかといはゞ、当時、世界の最大勢力たりと思はれし唐を措いて他に存すべきにあらず。こゝにその制度をとり大革新を断行せられたるものなりと思惟す。而して、その端緒は推古天皇の御世に發して孝徳天皇の即位によりて急激に成形せしものならむ。この間約五十年なりとす。

按ずるに、この革新は主として唐制をとられたれど、もとより唐の制度そのまゝのものにあらず。唐制を主として之に盲從せしものにあらずして、自ら主として取捨せられたるものなり。惟ふに、これは本朝の富強をはからむが為に計画せられたることにして、決して隋唐の成隸はた模倣を目的とせられしにあらずして、本朝の従来の弊を矯めて早く支那の力と拮抗せむが為には、彼の長をとりて我が短を補はむとせられしものならむことは、明治維新の後間も無く外国の制度を採用せられたりしに似たる精神に基づくものならむか。かくの如く觀じ来る時に、この革新は決して外国盲從のものにあざりしことを思ふべきなり。

さて、この革新は大化元年を以て端緒を發せられたれど、一朝一夕の能くなし遂げらるにあらねば、尔来屢詔ありて、屢変革ありて次第に調へ行きつゝ、あり。この改新に関して大化元年には詔を下さるゝこと五回、二年正月には改新の詔を下されて、大綱三条を示され、二月に又詔あり、その後三月にも亦二回、八月に一回詔を下され、三年には四月に一回、而して十二月には推古天皇朝よりの冠位を改めて、七色一十三階の制を定めたまひ、五年二月に改めて冠十九階を制せられ、同月に八省百官を置かれたるなり。



類聚三代格の序によれば、天智天皇元年に令二十二巻を制すと見ゆ。天智天皇の三年二月に至りて冠位を更に改めて、二十六階となさしめ賜ひ、十年正月には日本書紀に

施行冠位法度之事<sup>二</sup>大赦<sup>ス</sup>天下<sup>一</sup><sup>法度冠位之名具。載於新律令。</sup>

と記せる通り、律令を定められたるなり。これ即ち近江令といへるものなり。されど、これは今に伝らず。降りて、天武天皇の御宇に至り、十年二月詔して、律令を定め法式を改めむとして親王諸王及諸臣に命じて是事を修めしめられ、四月には禁式九十二条を立てられ、十一年八月壬戌朔には親王以下及諸臣に令して各法式として用ゐるべき事を申べしめられ、丙寅の日（五日）に法令を作られたる由、日本書紀にいへり。十四年には爵位の号を改めて「明位二階、淨位四階、毎階有<sup>二</sup>大広<sup>一</sup>、并<sup>セテ</sup>十二階」、これは諸王已上の位とし、「正位四階、直位四階、勤位四階、追位四階、毎階有<sup>二</sup>大広<sup>一</sup>、并<sup>セテ</sup>四十八階」、これは諸臣の位とせられたり。さて持統天皇の三年六月に「班<sup>二</sup>賜諸司令一部二十二巻<sup>一</sup>」とあるは天武天皇の朝に作られたるをこの時に班たれたるならむ。かくて、又文武天皇の四年六月に刑部親王・藤原不比等等に詔して更に律令を撰修せしめられ、大宝元年八月に至りて令十一巻・律六巻成りて上れり。これ即ち大宝の律令なり。大化元年よりここに五十七年なり。かくして後、律令は確定して一千有余年の法制となれり。

今講ぜむとする令は大略かくの如き事情によりて成立せるものなり。次には特にこの令の由来につきて述べむ。

#### ④ 令の由来

抑も令といふ語はもと支那の法令の上の名目にして律令格式と熟せる場合の一たるものをさす。もと律令と相対する時は史記酷吏伝に「杜周曰、前主所<sup>レ</sup>是著為<sup>レ</sup>律、後主所<sup>レ</sup>是疏為<sup>レ</sup>令」とある如く、法の大綱を示せるものを律といひ、之

を条分せるを令といひたるやうなれど、本邦にいふ所の律令はこれと意を異にす。晋の杜預の律序に曰はく、「律以正罪名、令以存<sup>二</sup>事制<sup>一</sup>」、これ即ち今の律令の意なり。しかも本邦にて令は律格式と四者相待つとせり。新唐書刑法志に曰はく、

唐之刑書有<sup>レ</sup>四、曰律令格式。令者尊卑貴賤之等数、国家之制度也。格者百官有司之所<sup>二</sup>常行之事也<sup>一</sup>。式者其所常守之法也。凡邦国之政必從<sup>二</sup>事於此三者<sup>一</sup>。其有<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>違及人之為<sup>レ</sup>惡而入<sup>二</sup>于罪戾<sup>一</sup>者一断以<sup>レ</sup>律。

と。即ち、かく四者を以て法典を一括せる名目とせるものは、唐の太宗の時に定めたるなり。隋にも律令はありしなるが、本邦にて格式と四者合せ称ふことは唐の制に倣ひたるものなるべし。さて、この四者の關係に就いては類聚三代格に載する弘仁格式序に

律以<sup>二</sup>懲肅<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>宗、令以<sup>二</sup>勸誡<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>本、格則量<sup>レ</sup>時立<sup>レ</sup>制、式則補<sup>レ</sup>闕拾<sup>レ</sup>遺、四者相須足<sup>二</sup>以垂<sup>レ</sup>範<sup>一</sup>。

とあるにて略知らるべきなり。伊藤長胤曰はく、

律令格式同キヤウナルコトヲ、四ツタテラレタルワケハ、令ト云ハ天下ハ一通ノ掟ニテ、万事ノ上ニ就テ此ノ如クセヨ、如此スルコトナカレト、号令ヲ定オキタルモノ、律ト云ハ、天下ノ人罪アルトキ、如此罪ハ流罪ニ処シ、如此ハ徒罪ニスルト云フ差ヲアラハシタルモノナリ。杜預律序曰、「律以正<sup>二</sup>罪名<sup>一</sup>、令以存<sup>二</sup>事制<sup>一</sup>」、杜氏通典云、「違<sup>レ</sup>令有<sup>レ</sup>罪則入<sup>レ</sup>律也」ト是也。格ト云ハ、代々天子ノ命令、或ハ律令ト少カハリタルコトモアリ、又律令ヲ丁寧ニセラル、コトモアリ、又律令ヲ丁寧ニセラル、コトモアリテ、臨時ノ御フレナリ。大明律ノ内ニ条例トアルノ類ナリ。本朝ノ三代格等ノ体ヲミルニ、中国ノ格モソノ通ナルベシ。式ハ百官ノ官府ニオコナフ次第作法、官ニヨリテ類シタルモノナリ。今ノ延喜式ノ体即是ナリ。

といへるに四者の關係明かなるべし。かくして格と式とは律令ありてはじめて用をなすものなれば、律令を以て本とすること明かなり。貞観格の序に曰はく、

律云、断罪須引律令格式正文。令曰、犯罪未断决逢格改者然則格者律令之条流云々

と。而して律令二者は法典の根本たること明かなれど、律はその法令に対して違犯ある場合に懲罰を加ふるを目的とするものなれば、国家の常備の法典は令を中心とし、本体とすること明白なりとす。

令はその法典としての性質は国家法制の中樞をなすものにして、容易に改めざるを原則とせり。この故に、本邦に於いての実際を見るに、中世以降頗るその事行はれざる様になりたれども、之を改むることなくして、その官制の如きは、大化改新以降明治十八年まで一千二百四十年継続せるを見、その位階の如きは、大宝以来一千二百四十余年の今日に於いても行はれてあるを見るなり。之を以て見ても令の講究は今日に於いても決して徒尔にあらざるを見るべきなり。

さて、令は上述の如く、隋唐の令に模範をとりたることは掩ふべからざる所なるが、これは何時頃より成立せしか。その事のあらまは上の条々にも少しく述べたるが、今、令義解の附録とせる

#### 応撰定令律問答私記事

と題する天長三年十月五日の太政官符を見るに、この令の由来を載せたり。曰はく、

大学寮解僞、明法博士外従五位下額田国造今足解僞、謹検旧記、律令之興、年代浸遠、沿革随時、損益因世。藤原朝廷御宇正一位藤原太政大臣、奉勅、制令十一卷律六卷。博士正四位下野朝臣古麻呂、贈正四位上調忌寸老人、正五位下守部連大隅、從五位上道公首名、從五位上伊吉連博徳、從五位下伊予部連馬甘等、至三于大宝元年修撰既訖、施行天下。平城朝廷養老年中、同太政大臣復奉勅刊修律令各為三十卷。博士正四位下大和宿祢長岡、從五位下陽胡史真身、從五位下矢集宿祢虫麻呂、從五位下塩屋連古麻呂、從五位下山田連白金等。

といひ、又弘仁の格式の序を見るに、

暨于推古天皇十二年上宮太子親作憲法十七箇条。国家制法自茲始焉。降至天智天皇元年制令廿二卷。世人所謂近江朝廷之令也。爰逮文武天皇大宝元年贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等、奉勅、撰律六卷・令十一卷。養老二年、復同大臣不比等奉勅更撰律令、各為三十卷。今行於世。律令是也。

とあり。即ち今いふ所の令はこの養老の令たること明かなり。この養老の令の基づく所は大宝の令にあり。その大宝令の基づく所は蓋し天武天皇十一年八月に造られたる法令にして、持統天皇の三年六月に諸司に頒ち賜ひしものなるべし。これは日本書紀のこの時の記事に「令一部二十二卷」とあれば、大宝令はその巻数を半に減ぜられたりと見ゆるが、その内容を知らねば、云々すること能はずといへども、恐らくは損益する所ありて半数の巻になりたるにあらずして、主として巻の分合の結果によるものならむ。さてその天武天皇の時の令も亦その基づく所は近江朝廷の令にありしならむか。その律令のことは天智天皇十年正月の記事に注せるにて知る、が、その巻数は明かならねど、弘仁格の序には令廿二卷といへり。さらば、天武天皇の時に造られしものもこの巻数に同じといふべし。然るに、弘仁格は天智元年に制せられしものといひ、日本書紀には同十年とせり。然れどもこの十年の記事は「施行官位法度之事」とあるによりて、制定はこれより前に行はれしものなるを考ふべし。大織冠伝によるに、

帝令大臣撰礼儀刊定律令作朝廷之訓、大臣与賢人損益旧章略為二条例。

とあれば、この法度の事は藤原鎌足の主として当りしものか。然るに、鎌足は天皇の八年に薨じたるが故に、この制定は七年以前にあるべきものなりとす。而してここに旧章を損益すとあれば、大化改新以来の法令を網羅して組織したるものなるべし。かくて今の令は大宝・養老の制なれども、その基づく所は大化の改新



にあり。尔来それを損益すること屢ありて今日の様となりたりといふべきものなるべし。

続日本紀文武天皇四年三月甲子に「詔<sup>三</sup>諸王臣<sup>一</sup>、讀<sup>三</sup>習令文<sup>一</sup>、又撰<sup>三</sup>成律条<sup>一</sup>」とあり、これは天武朝の令のことなるべし。同年六月に大宝律令の撰を勅定あり、その撰者として任ぜられたるは、

勅<sup>三</sup>淨大參刑部親王、直広<sup>一</sup>、<sup>三</sup>藤原朝臣不比等、直大<sup>一</sup>、粟田朝臣真人、直広<sup>一</sup>、<sup>三</sup>下毛野朝臣古麻呂、直広<sup>一</sup>、<sup>三</sup>肆伊岐連博得、直広<sup>一</sup>、<sup>三</sup>肆伊余部連馬養、勤大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>肆坂合部宿祢唐、務大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>大老白猪史骨、追大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>老黃文連備、田辺<sup>一</sup>、<sup>三</sup>史百枝、道君<sup>一</sup>、<sup>三</sup>首名、狹井宿祢尺麻呂、追大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>老鍛造大角、進大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>老額田部連林、進大<sup>一</sup>、<sup>三</sup>武田辺史首名、山口伊美伎大麻呂、直広<sup>一</sup>、<sup>三</sup>肆調伊美伎老人等<sup>一</sup>、撰<sup>三</sup>定律令<sup>一</sup>。賜<sup>三</sup>禄有<sup>一</sup>差。

とありて、すべて十七人の名をあぐ。さてその翌大宝元年三月の紀に「始依<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>改<sup>三</sup>制官名位号<sup>一</sup>」とありて、この時既に成りて執行せられたるなり。然れども完成せざりしものか、同書四月庚戌「遣<sup>三</sup>右大弁從四位下<sup>一</sup>毛野朝臣古麻呂等三人<sup>一</sup>、始講<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>。親王・諸臣・百官人等、就而習之<sup>一</sup>」、六月壬寅朔「令<sup>三</sup>正七位下<sup>一</sup>道君首名說<sup>三</sup>僧尼令于大安寺<sup>一</sup>」、己酉「勅、凡其庶務一依<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>」、是日「遣<sup>三</sup>使七道<sup>一</sup>、宣<sup>三</sup>告依<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>為<sup>一</sup>政、及給<sup>三</sup>大祖<sup>一</sup>之状<sup>一</sup>」、八月の紀に癸卯（辛丑朔なる故に三日なり）

遣<sup>三</sup>三品刑部親王、正三位藤原朝臣不比等、從四位下<sup>一</sup>下毛野朝臣古麻呂、從五位下伊吉連博德・伊余部連馬養等<sup>一</sup>、撰<sup>三</sup>定律令<sup>一</sup>、於是始成。大略以<sup>三</sup>淨御原朝廷<sup>一</sup>為<sup>三</sup>准正<sup>一</sup>。仍賜<sup>三</sup>禄有<sup>一</sup>差。

とあり。されば完成には凡一年三月を要したるなり。この時の律令の卷数はここに明文を見ざれど、上にあげたる天長三年の太政官符、弘仁格式の序によりて、令十一卷・律六卷たりしことを見るべし。かくて、この令は同年八月戊申（八日なり）に

遣<sup>三</sup>明法博士於六道<sup>一</sup>、<sup>除<sup>二</sup>西海道<sup>一</sup></sup>、講<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>。

令を講ずる総説（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）（山田）

とあり、又大宝二年七月に詔して内外文武官をして新令を讀習はしめられたり。同十月に律令を天下の諸国に頒下せしめらる。

さてその大宝の律令を養老に改められしことは続紀には明文なけれど、弘仁格式の序には養老二年に改修せられて律令各十卷となれりといひたり。続紀天平宝字元年五月の勅に、

自今以後、宜<sup>レ</sup>依<sup>三</sup>新令<sup>一</sup>。去養老年中、朕外祖故太政大臣、奉<sup>レ</sup>勅刊<sup>三</sup>脩律令<sup>一</sup>。宜<sup>三</sup>告所司早使<sup>一</sup>施行<sup>一</sup>。

と見え、同年十二月の太政官奏に

正五位上大和宿祢長岡、從五位下陽胡史真身、並養老二年修<sup>三</sup>律令<sup>一</sup>功田各四町。外從五位下矢集宿祢虫麻呂、外從五位下鹽屋連古麻呂、並同年功田各五町。正六位上百濟人成同年功田四町。五人並執<sup>三</sup>持刀筆<sup>一</sup>刪<sup>三</sup>定科条<sup>一</sup>、成功雖<sup>レ</sup>多、事匪<sup>三</sup>匡難<sup>一</sup>。比較一同<sup>三</sup>下毛野朝臣古麻呂等<sup>一</sup>。依<sup>レ</sup>令下功。

とあれば、養老二年に修撰ありしこと知られたり。

さて今の令は十卷たる由なれば、養老に改修せるものなるべし。されど、その改修は先哲の既に論ぜるが如く、根本的の改革にあらずして所謂刪定を加へたるに止まりしものの如し。かくしてこの養老の令もその後、多少の改修ありしことは続紀延暦十年三月の紀に

故右大臣從二位吉備朝臣真備、大和国造正四位下大和宿祢長岡等、刪<sup>三</sup>定律令廿四条<sup>一</sup>。弁<sup>三</sup>輕重之舛錯<sup>一</sup>、矯<sup>三</sup>首尾之差違<sup>一</sup>、至<sup>レ</sup>是下<sup>レ</sup>詔、始行<sup>三</sup>用之<sup>一</sup>。

とあり。これは大和長岡の死せる神護景雲三年以前に改刪せしものなるべきなり。かくて嵯峨天皇の弘仁三年にも少しく改められたる所あるが如しといへどもその大綱は動くことなくして明治のはじめに及べるなり。

# ⑤ 現存の令の事情

本朝法家文書目録（この書は律令格式に亘りて書目を載せ、一々の細目を掲げたるものにして、今伝はらざる書名を伝ふること少からずして古代法制の書籍を調査すべき主要なる資料なり。この書は所々に写し伝ふるものなるが、原書は律集解・令集解の著以前の書にして近世のものにはあらずと見えたり）によるに、

令一部十卷<sup>卅篇</sup>

養老二年与<sup>遠カ</sup>律並作、天平勝宝九年五月廿一日勅令施行、延暦十一年六月又令施行。天長十年二月十五日右大臣清原夏野等奉<sup>レ</sup>勅撰<sup>二</sup>義解<sup>一</sup>、同<sup>二</sup>年<sup>一</sup>十二月又上<sup>二</sup>表義解<sup>一</sup>、承和元年十二月八日又令施行。

第一 官位一 第二 職員令<sup>一</sup> 後宮職員令<sup>二</sup> 東家令職員令<sup>三</sup> 五 第三 神祇六 僧尼七

第四 戸八 田九 賦 第五 選叙<sup>一</sup> 十二 繼嗣<sup>二</sup> 十三 考課<sup>三</sup> 十四 禄<sup>四</sup> 十五 第六 宮衛<sup>一</sup> 十六 軍防<sup>二</sup> 十七

第七 儀制<sup>一</sup> 十八 衣服 第八 公式<sup>一</sup> 廿一 第九 倉庫<sup>一</sup> 廿二 厩牧<sup>二</sup> 廿三 医疾<sup>三</sup> 十九 營繕<sup>四</sup> 二十 飯室<sup>五</sup> 廿五 喪葬<sup>六</sup> 廿六

第十八 関市<sup>一</sup> 廿七 捕亡<sup>二</sup> 廿 十九 獄<sup>三</sup> 廿九 雜<sup>四</sup> 三十

と見えたり。

今伝ふる所の令は大宝の令のまゝ、又養老の令のまゝのものにあらずして、実に令義解によりて伝はれるなり。この故に令義解に就いて説くことを要す。

令の義解は、令の本文を掲げてこれに注釈を加へたるものにして、淳和天皇の天長三年十月五日の太政官符に（令義解附録）よりて律令問答私記を撰定せしめられたるに基づきてなれる勅撰の書なり。この勅命はもと明法博士額田国造今足の上申に基づきたるものにして、その上申に、

諸博士等相承教授、文略義隱、情理難<sup>レ</sup>通。既無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>由<sup>二</sup>先儒旧説<sup>一</sup>。而彼旧説、或為<sup>二</sup>問答<sup>一</sup>、或為<sup>二</sup>私記<sup>一</sup>、互作<sup>二</sup>異同<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>詳<sup>二</sup>誰作<sup>一</sup>。後学者等属<sup>二</sup>意彼此<sup>一</sup>每有論決難<sup>レ</sup>塞。

この故に、

望請命<sup>二</sup>當時博士等<sup>一</sup>撰<sup>二</sup>先儒之旧説<sup>一</sup>、省<sup>二</sup>彼迂説<sup>一</sup>、取<sup>二</sup>此正義<sup>一</sup>、勒成<sup>二</sup>卷帙<sup>一</sup>、以備<sup>二</sup>解釈<sup>一</sup>。庶俾<sup>下</sup>学者易<sup>レ</sup>解与奪莫<sup>レ</sup>異者。

といへり。（令義解序によるに）かくて、勅によりて、

右大臣清原真人夏野 参議南淵朝臣弘貞 勘解由長官藤原朝臣雄敏

刑部大輔藤原朝臣衛 大判事興原宿祢敏久 阿波守善道宿祢真貞

大宰少貳小野朝臣篁 左少史兼明法博士勘解由判官讃岐公永直

判事少属川枯首勝成 明法得業生漢部松長

等が弁論執議して遺文を探り、識者を訪ひ、それら善者に従ひ、悉く法曹の旧言によりて添削して成稿し、天長十年二月十五日に上表せるなり。類聚国史律令格式の条に、

淳和天皇天長十年二月壬申、右大臣清原夏野、中納言直世王、源朝臣常、藤原朝臣愛発、権中納言藤原朝臣吉野、参議南淵朝臣弘貞、文室朝臣秋津、藤原朝臣常嗣、侍<sup>二</sup>殿上<sup>一</sup>、校<sup>二</sup>讀新撰令釈<sup>一</sup>疑義起請。

とあり。これはかの上表と同じ日のことなり。かくて続日本後紀によるに、仁明天皇の承和元年十二月辛巳に

施行<sup>下</sup>天長年中所<sup>二</sup>新撰<sup>一</sup>令義解<sup>上</sup>

せしめられて詔あり。それによれば

爰勅<sup>二</sup>在朝<sup>一</sup>、廼令<sup>二</sup>討覈<sup>一</sup>、稽<sup>二</sup>之於典籍<sup>一</sup>、参之以<sup>二</sup>古今<sup>一</sup>、迄<sup>二</sup>滯疑<sup>一</sup>、祇稟<sup>二</sup>聖断<sup>一</sup>、咸弁析、已尽会通

したるものにして勅宣によりて宣し、

普使<sup>下</sup>遵<sup>二</sup>用画<sup>一</sup>之訓<sup>一</sup>、垂<sup>中</sup>於万葉<sup>上</sup>。

とあるが如く万世に亘りて用ゐしめられたるものなり。

かくして令義解一たび公布せられてより専ら之を規準とすることとなり、爰に於いて令といふ時は主としてこの令義解をさすこととなり、令の文もこの義解の本文をさすこととせるなり。

養老の令十卷三十篇の名目は、その序に列記するところと本朝法家文書目録に示す所と巻次相違して三十篇の目は一致せり。然るに、この令義解は中古亡びたる篇ありて、古の面目の全く伝はりたる本を見ず。この書の古写本は猪熊信男氏の蔵する所の神祇令及び僧尼令なり。本書の刊行せられたるは慶安三年の版を古しとす。これには倉庫令、医疾令、関市令の三篇闕けたり。後、関市令は明和四年に阿波の光源元寛の校して刻したるものと明和六年に荷田在満の校定したるものと世に出でたり。倉庫令と医疾令とは稲葉通邦の逸文を集めて逸令と名づくるもの一巻あり、又内藤広前の逸令考にもその逸文を収めたり。寛政十年塙保己一が校刊せる令義解は上の二篇の逸文と関市令とを収めて全篇や、完きものとなれり。されど、近頃世に出でたる貞観の交替式に倉庫令の逸文も見れ、又上にあげたる逸文を訂正すべき例もあり。

とにかくに些か令を知らむとするには塙本を最もよしとす。これとてもなほ校定を要すべき点ありて完全のものにあらざれど、今日にては之によるを最もよしとすべし。

#### ⑥ 令の講究

令の制定ありとても、これが普及せずしては事行はるべからず。この故に大宝令の成るや大宝元年四月に右大弁下毛野朝臣古麻呂等三人をして改めて新令を講ぜしめられ、親王・諸臣・百官人等就て習ふと史に見え、その六月には道君首名をして僧尼令を大安寺にて講ぜしめられ、又八月には明法博士を西海道を除く六道に遣して新令を講ぜしめられたり。大宝二年七月には詔して内外文武官をして新令を読み習はしめられたり。さて律令は国家の骨格を樹立するものなれば、常に之が学習を怠らずして熟達せしめざるべからず。ここに於いて国家の長く学校に於いての必修の学科とせり。学令を案ずるに、京に大学あり、国に国学あり。大学生には五位以上の子孫、東西史部の子を取り、又八位以上の子は情願により

て之を聴し、国学生には郡司の子弟を取ると規定せられたり。而してその学科は經書を主として文藻に閑はしめたるが、別に算学生、書学生あり。而して明法の道は学令に載すること無しといへども、その書学生の考試得第者の「叙法、一准「明法之例」とあれば、別に明法道の存せることは明かなり。

選叙令によるに、

凡秀才、取「博學高才者」。明經取「下學通「三經以上」者」。進士取「明閑「三時務」、并讀「文選爾雅」者」。明法取「通「達律令」者」。皆須「方正清循、名行相副」。とあり、考課令によるに、それら秀才、明經、進士、明法の貢人を考試する規定を示せり。その明法は、

凡明法、試律令十條。謂依「此令」必可「有明法博士及生」。律七條、令三條。識「達義理」問無「疑滯」者為「通」。粗知「綱例」未「究」指「歸」者為「不」。全通為「甲」。通「二八以上」為「乙」。通「二七以下」為「不第」。

とあり。ここに職員令には明法博士の官見えねど、その官ありしことは明にして、その道の学生もありしことはこの令の文にて明かなり。然るに之を載せざるは如何。令集解に論じて曰はく（考課令明法条下）

謂依「此令」必可「有明法博士及生」。

と。明法博士、明法生の存せしことは明かなるに之を令に載せざるはいぶかし。蓋し令外官として取扱ひしならむ。令義解には見えねど、令集解職員令の大学寮の条に、

律學博士二人 明法生十人 文章生廿人 得業生十人

と見たるは、明法博士の事ならむといふ。これは天平二年三月廿七日の奏によると注せるが、官位令集解には神龜五年七月廿一日格によりておかれ、享祿本類聚三代格には神龜五年十月廿一日に置かれたる由に見ゆ。かくして大学には必ず明法道を置かれて明法生に本邦の律令を講習せしめられたるなり。

ここに注意すべきは大学に於いて学ぶ所は、本朝文粹なる三善清行の意見封事

によれば、天平の代に至りて、右大臣吉備朝臣真備が親しく自ら伝授して、学生四百人をして五經、三史、明法、算術、音韻、籀篆等六道を習はしむとありて、当時の大学の学科を見るべく、令集解の得業生十人の注には「明經生四人、文章生四人、明法生二人、算生二人」とあれば、職原抄にいふ四道の称は既にこの時に生ぜしなり(紀伝道、明經道、明法道、算道)。而して、他の三道はもと支那伝来の学を講義して伝ふるものなれど、ひとり、明法道のみは専ら現代の法令を以て教科としたるは十分に注意すべきことなるを知るべし。これ蓋し法令は国家の活動に於いて実地に即して行はるべきものなれば、漫に理論のみを講ずるが如きことは時務に即せざるが故なるべし。

かくの如くなれば、明法の学は苟も官人たらむもの一日も缺くべからざるものにして、法令の解釈の如きは、漫りに多岐にわたるを許さざるものあり。ここに勅定によりて令義解の生じたる所以も存すといふべし。されど、法文は固定されど、人世の事は千変万化して一日も止まず。この故にその変化するものを固定せる法文に照して処理する場合には常に法文の性質を顧みてその意義を明かにして適用せざるべからず。これ世を委ねて常に法文の意義を究明する必要がある所以なり。かの大宝令の制定以来屢変改あり、又格条の屢出でたる所以も亦ここに存す。されば令の講明はその存し絶えず行はれたるものなりとす。本朝法家文書目録を見るに、令の注疏として二部ありて、

# 令義解

の前、その令釈の名をあぐ。それは、

## 令釈一部七卷卅卷

第一 官位 第二 戸田 賦役 学 第三 選叙 第四 宮衛 第五 公式 第六 倉庫 第七 獄雜

とあるが、撰者の名も撰定の時も明かならず。令集解にこの書を引きたれば、その古きを見るべし。本朝書籍目録には令の注疏として上の令釈七卷と令義解との

外に令集解との外に

三十卷抄 三十卷 明兼抄

と見ゆ。これは今伝はらねば、明かならず。著者は明法博士坂上明兼にして、鳥羽・崇徳・近衛の三朝に仕へて道の耆宿なり。その著に法曹至要抄ありて今に伝はる。これは令の末、弘仁格の前に列したれば蓋し、養老令三十篇の注抄なるべし。なほこの外に

刪定律令問答一卷 上中下蓮華王院

とあり。これには明法家の律令に關しての部分質疑応答を刪定して一書とせしものならむが、今伝はらず。蓮華王院は後白河天皇の御願によりて建立したるものにて、その宝藏には貴重なる宝物を収められたるなり。又

# 令惣記

の名あり。卷数も著者も記さず。この書の名は実隆公記大永三年九月十九日の条にありて「十六卷」と記し、北山抄卷六詔書の条の注にも江家次第元日宴会の条の注も見れたり。これは令集解と同じ書ならんといふ説もあれど(律令考)、遽かに断言すべからず。

令集解は現に存す。これは本朝法家文書目録に見えず。これによれば恐らくは本朝法家文書目録の成りし時に未だこの著なかりしものならむ。これは本朝書籍目録に

令集解 三十卷 直本撰

とあり。直本は惟宗朝臣直本にして、もと讃岐国香川郡の人にして本姓秦公なりしが、元慶元年に兄明法博士直宗と共に本貫を右京職に移し、同七年十二月に惟宗朝臣の姓を賜はる。律令に通じて明法博士たり。直本にはこの外に律集解、檢非違使私記の著あり。政事要略六十一糺彈雜事の条によれば、この書は藤原時平が檢非違使別当たりし時に、直本が右衛門尉としてその命によりて撰したりといふ。而して、延喜七年には主計頭兼明法博士たりしこと源語秘訣に見えたれば、



この書もその延喜の頃に撰せしならむ。令集解は現に存すれど、完本にあらず。群書一覧に

令集解<sup>シツカイ</sup> 写本 三十七卷 惟宗ノ直本

注釈義解に比すれば、すこぶる詳にして本文義解と異なる事多し。左書の引証は多く集解により。

といへり。かくてはその巻数多くなれるが、その内容は軍防、倉庫、医疾、関市、捕亡、獄、雑の七篇亡佚して二十三篇を存するに止まる。さればその巻数は後に細分せしものならむ。この古写本は内閣文庫に蔵する旧金沢文庫本三十五巻、佐々木信綱博士蔵の船橋秀賢の校本四巻等あり。この本久しく写本にて伝れるが、明治四十五年の頃、石川助の校定して活字版に附したるもの三十六冊あり。明治四十五年に三浦周行博士の校定本をば国書刊行会にて出版したるが、後に三浦博士と滝川政次郎とにて

定本  
令集解釈義

を出版せり。

令集解は令義解の後にいで、その後の諸説を集成したるものと見えたるが、この書に引きたる注疏は

釈 令釈 附釈 令釈後記 令釈問答 新令釈

雑令私記 新令問答 読新令 新令私記 雑令説 別記

古記 新令秘私記 二巻私記 古私記 先私記 跡私記

師記 跡記 物記

等の名を見る。なほ書名にあらずして諸家の考説を引けるには（私案）

穴云 穴案 穴記（突伝）（法曹類林二百弘仁五年壬午三月ノ勘文ニアル突内人

跡云 跡曰 跡記 （跡連の義か（阿刀 承和十年改姓））

朱云 （義解ノ朱ナルベシ）

貞云 貞説 貞後説 （貞江継人？ 弘仁頃明法博士）

讃説 讃云 讃案 （讃博士 讃岐公永直？）

或云 或説

伴云 伴記云 伴案 律跡云 （伴宿禰成益カ 令義解ノ撰者）

物云 物説 （物部中原宿禰敏久 令義解ノ撰者）

額博問比説

額大夫説 （額田国造今足ナラム）

堂説

掠哲所説 掠云

大属尾張浄足説（雅楽寮）

古説

等の説を引き、なほ令に関しては

前令 新令 古令 古仮寧令 官員令

等の名をあげたり。これら皆、令集解の資料となりしものにして、当時の研究の盛んなりしあとを見るべし。

さて、かく令の研究は盛んなりしが、前平安朝の中頃より明法道が、惟宗、坂上、中原等の家の道の如くなりて一般の官人の盛んに学ぶことは無くなりしが如し。かくて朝政の衰ふると共に令の研究は漸く衰へ行きたり。鎌倉幕府が政権を私したる時代にも令の学は全く無きにあらずることは金沢文庫本の令集解のあるにても知らるれど、盛なりとはいひがたし。室町幕府が政権を執りし時代にこの道は清原・中原二家の占領に帰したるさまにして、その他には僅かに一条兼良その冬良等の令抄又は聞書あるに止まり。江戸幕府の初、文教稍復活したりしかど、令の研究は未だ起らず、慶安三年に不完全なる令義解を出版したるに過ぎぬさまにてありき。かゝる際に当りて令の研究を復活せしめたるは実に荷田春満なりとす。律令を研究せずば神皇の道の復古すべきにあらずとする主張はかの創国学校啓に明かなり。幕府の書物奉行下田師古が嘗て徳川吉宗の命を承けて、



貞観儀式、西宮記に限らず、古書之内<sup>二</sup>板行に成<sup>而</sup>倭学者最重宝に可<sup>レ</sup>存書は何ぞやと質したる時、春満は

右、貞観儀式よりも西宮記よりも古書之内<sup>二</sup>板行に成<sup>而</sup>申候<sup>而</sup>、倭学者の重宝と可<sup>レ</sup>存書は令集解<sup>二</sup>御座候<sup>、</sup>集解之文字等吟味之上<sup>二</sup>板行<sup>二</sup>成候はゞ至極之重宝<sup>二</sup>成可<sup>レ</sup>申候と存候、

と答へたることあり。春満は実に令の研究を盛んならしめたることに功大なる人なり。春満の著に

#### 令義解節記 五冊

残れり。これは

- 一 (官位令<sup>一</sup> 職員令<sup>二</sup>) 二 (後宮職員令<sup>三</sup> 東宮職員令<sup>四</sup> 家令職員令<sup>五</sup>)
- 神祇令<sup>六</sup> 僧尼令<sup>七</sup> 戸令<sup>八</sup> 三 (田令<sup>九</sup> 賦役令<sup>十</sup> 学令<sup>十一</sup>) (選叙令ナシ)
- 繼嗣令<sup>十三</sup> 四 (考課令<sup>十四</sup> 禄令<sup>十五</sup> 宮衛令<sup>十六</sup> 軍防令<sup>十七</sup>) 五 (儀制令<sup>十八</sup> 衣服令<sup>十九</sup> 營繕令<sup>二十</sup> 公式令<sup>二十一</sup>)

にして、今日より見て疏なるものなれど、令の注釈としては一新面目を發揮せるものなりとす。春満の姪にして養子たる在満はその家学を嗣ぎて法制度の学に志を専らにせり。その著令三弁は小冊子なれども見識ある著なりとす。平沢元愷の令解会説は十一巻にして羽倉氏学元愷輯とあり。蓋しこれに在満の学を継ぎしものならむか。この頃より後令の講究の次第に盛んになり、

- 講令備考 二〇 稲葉通邦 河村秀根 石原正明 神村正鄰
- 令義解講録 一〇 新井祐登 (白蛾)
- 令義解愚注草稿 一〇 壺井義知
- 新釈令義解 卅八 藺田守良
- 標注令義解 十一 近藤芳樹

等の大著述出づるに至れり。

ここに近世の国学者が力をこめて令を研究せしことにつきて、その正しき意義

を忘るべからざることあり。現代に於いては令は古代の法制といふべきものに似たれど、国学者は決して古代の法制と考へて研究したるにあらず。天皇の大御政にありては当時は明かに現代の法制なりしものなり。左々幕府がその心のまゝに大政を左右せしによりて、それらの事が大部分行はれずなりてありたるに止まる。それ故に天皇親政の御世に復する時に令の制度は理論上は實地に施行せらるべき性質のものなれば、その為に、即ち天皇親政の御世の実現の為に専ら研究したるものなり。特にその官位令の制度の如きは明白にその現代の制度として行はれ、職員令の制度も名目上は明かに行はれてありしものなれば、決して過去の法制にはあらずなり。かくてその明治維新の実現すると共に二官八省の制度が名実共に一旦復活実現したることは著しく、而してその官省の制度は次第に変更せられたれど、明治十八年までは行はれてありしものなるが上、その位階の制度はその性質少しく変更したれども現に行はれてあることを忘るべからず。

#### ⑦ 令に就いての研究の要領

今日に於いては令はそのまま、現行法として研究することを得ざるものなるが、しかもその研究は価値無きものにあらず。今その研究の方法に就いて考ふるに、先づその令自体の内容に就いて仔細に研究することを第一とす。次にはその源流に就いて研究することなり。これには又二の方面あるべし。一は唐制を採用せられたりといふは如何なる程度に於いて如何なる部分に就いて、又如何なるさまに採用せられたるかといふこと、二は唐制に参酌せられたる古来の制度は如何なる程度、如何なる部分に如何なるさまに保存せられたるかといふことなり。第三はその令の制度が如何なる精神を以て如何なる形を以て、古の道を保存したるか、又その令の制度の精神及び形が、今日に果して伝はり存せるか如何といふことなり。

かくて令の研究は、外はその源流の一たる唐の令との關係に就きての研究を必要とするものにして、内は本邦古来の氏族制度の時代、即ち大勢三転考にいふ所

の骨の代の制度との関係に就きての研究を必要とするなり。かく又それが、法令自体としての研究に於いては横には律との関係に就いて終始考慮を加へつゝ、進まざるべからざると共に、縦には格式にも及ばざるべからざるものなるが、特に式に就いて仔細に検せざる時は要領を得難きこと少しとせず。かくなれば溯りては古事記・日本書紀にも及ばざるべからず。かくの如く内外に亘り、古今に通じてはじめてその研究を完うし得たりといふべきなり。

かくの如くにして令自体をば稽古照今の結果生じたる所以のものたることを明かにすることを得べきが、それと同時に吾人は更に令そのものをば稽古照今の目的を以て見るを要するなり。

#### ⑧ 令の中唐の制を如何に採用せるか

既に説きたる通り、令といふ成文法それ自体が唐の制なれば、令は全体的に唐制を標準とせりといふべし。群書一覽には

此令は唐の開元令を損益して編れたるもの也 唐令の目録は唐六典に見えたり。

といひてその目を示せり。されど、佐藤誠実は説きて曰はく、

さて大宝令は何に本づきしぞといふに、近江令より出でたることは言わんも更に、武徳か貞観か永徽かは知らねど、必ず唐令に本づきしものにて、恐らくは其中にて永徽令に依りしならん。

といひ、又

新令は必ず唐の永徽令に依りたるものならん。然るに令抄に本朝令は開元令を本としたるとあるは違へるが如し。そは唐六典に皇朝之令、開元初、姚元崇、四年宋璟並刊<sup>定</sup>といひ、通典に、開元初、元宗又令<sup>刪</sup>定格式令、名為開元格、又刪<sup>三</sup>定律令、名為開元後格、至三十五年、又令<sup>刪</sup>緝旧格式律令及勅、總七千四百八十条、其千三百四条於<sup>レ</sup>事非<sup>レ</sup>要、並刪<sup>三</sup>除之、

二千一百五十条、随<sup>レ</sup>文損益、三千五百九十四条、仍<sup>レ</sup>旧不<sup>レ</sup>改、總成<sup>三</sup>律十二卷、疏三十卷、令三十卷、式二十卷、開元新格十卷、とありて、開元令は開元の初年のをいふか開元元年は和銅六年に當る、二十五年のをいふか二十五年は天平九年に當る、詳ならねど、養老令の開元に依らぬことは、六典刑部に挙げたる開元令の篇目と我が

令の篇目とを比較する時は明なるべし。六典六典は、開元二十七年に、李林甫の註成りて上りしものなりに凡令二十有七分為三とありて其次に篇目あり。官品分為上下とあるは我が官位令に

當り、三師三公台省職員・寺監職員・衛府職員・東宮王府職員・州縣鎮戍獄瀆閔津職員・内外命婦職員の六篇は、我が職員以下の四篇に當る。戸令・考課・宮衛・軍防・衣服・儀制・公式・田令・賦役・倉庫・廐牧・閔市・疾疾・

營繕・喪葬・雜令の十六篇は、我と同じ。選叙考課令集解大式以下云々の条に見て誤れるを選舉といひ、獄令を獄官令といふは、唐選叙令とあるは、吾が令に準じなるべし。我と少か異なり。祠令は我が神祇・僧尼の二令に當るべし。但し我が僧尼令は、令聞書に唐開元令には

僧尼令なし、唐道僧格日本現在書目録に僧格一といふ書を以て僧尼令につくりなすなりとあり。僧尼令集解に道僧格を屢引きたるにてもしか思はる、なり。

されば、僧尼令は祠令と道僧格とに拠りたるものか。学令は開元令になし。隋令にあれば六典に依る、永徽令にもありしか詳ならず。禄令も開元令にはなし。されど永徽令にはありしなり。そは唐律疏議職制の受財枉法の条に、

応<sup>レ</sup>食<sup>レ</sup>禄者具在<sup>三</sup>禄令<sup>一</sup>といひ、享禄本類聚三代格卷六弘仁十年十二月十五日の官符に唐永徽禄令を引ければなり。封爵令は我が令には無く、繼嗣令は

開元令になし。我が繼嗣令は永徽の封爵令を加へて編成せしなるべし。繼嗣令集解三位以上繼嗣の条に封爵令を引けると、唐律疏議詐偽、非正嫡不<sup>レ</sup>應襲

爵に引ける封爵令とを合せ考ふべし。又唐律疏議名例、会赦宥改正徵收に依令といひ、準令といふも封爵令なり。永徽令に此篇のありしを知るべし。仮

寧令は開元令にはなけれど、隋令にあれば六典、永徽令にもありしならん。捕亡令は開元令にはなし。されど永徽令にありしことは唐律疏議捕亡の罪人

逃亡、及び鄰里被強盜に捕亡令を引けるにて知るべし。鹵簿令は我が令にはなし。儀制令には取りしことあるべし。唐律疏議鬪訟の越訴に引ける鹵簿令などを視て知るべし。是にて我令の永徽令に依りはしたれど依らぬ処もあるを知るべし。又我令は頭考課令の清慎頭着の頭をの字六典には明と改めたり。詔の字を挙げて、詔を制としたり。我令には唐にては玄宗より後は其の字を避けたり。通典に期親を周親とせるが如の字あり。其の字三代実録貞觀十三年十月五日の条に開元令を引ききて、不杖其を不杖を避けず。是も我が令の開元の依らずして永徽の依りし証とすべし。又永徽より前の名を用ゐたるあり、民部の如き是なり。民部卿は、日本紀天武天皇六年唐の高宗の儀鳳二年に始て見えて、隋の開皇の制に基づきしなり。通典に開皇三年改三度支一為二民部、大唐永徽初復改二民部一為三戸部、廟諱故也、とありて、註に太宗在位詔官名及公私文籍、有二世民二字（同カ）不相連一者、並不諱、至三高宗始諱之とあるを見て知るべし。

新令は古令を修正せしものにて、永徽令に拠りしことは上に言へり。されど令にのみ拠りしにあらずして格式にも拠りしことあるべし。道僧格に拠りしことは上に言へり。儀制令の内外官人有下侍儀制令集解に刑部格を引けり其位蔭、故違中憲法上、といふ条も、唐の刑部格に拠りしやうに思はる。又宮衛令の京路分街立鋪の条は唐の監門式に拠りしなり。そは衛禁律の越兵庫垣の疏に依二宮衛令一とありて此文を引けるを、唐律疏議には依二監門式一とあるにて知るべし。又軍防令の烽昼夜分時候望の条は唐の職方式に拠りしなり。そは衛禁律の烽候不警の条に依レ令とありて此文を引けるを、唐律疏議には依二職方式一とあるにて知るべし。又三代実録貞觀十三年十月五日の条に、至三於喪制、則唐令無レ文、唯制二唐礼一以挹行之、而国家制レ令之日、新制二服紀一条一附二喪葬令之末一、とあるは、服紀は唐礼により折衷して文を成し、ものか。

又唐令は隋の開皇令より出でて武徳以来屢変更はしたれど、大体は大かた違はざるべし。されば我律令（マズ）の後に變更せし時には、開元令に拠りしこともあるべし。

以上にて、唐令に拠りしことの大略をさとるべし。

我が令の準拠たりしものは永徽令か開元令かといふことは一概にはいひかねることならむが、大宝令は開元より先なれば、開元令によりしにあらざるは明かにして、この時の最も新しき唐令は永徽令なり。而して、近江令も天武朝の令も亦永徽令より後なりとす。しかも、唐の令は今では伝らねば、之を積極的に論証すること難しとす。近比仁井田陸氏の労作たる唐令拾遺ありて、略その全貌を推定しうべし。仁井田氏は諸種の方面より研究してこのあげられたる目を以て吾人の比較の標準とすべし。開皇令（樂、宮繕、医疾、捕亡ナシ）（武徳令、衣服令アリ）

一、官品令	官位令 一
二、三師三公台省職員令	職員令 二
三、寺監職員令	
四、衛府職員令	
五、東宮王府職員令	東宮職員令 四
六、州県鎮戍獄瀆閹津職員令	家令職員令 五
七、内外命婦職員令	（職員令 二 二入ル）
八、祠令	後宮職員令 三
九、戸令	神祇令 六〇
十、学令	戸令 八
十一、選舉令	学令 十一
十二、封爵令	選叙令 十二〇
十三、禄令	繼嗣令 十三〇
十四、考課令	禄令 十五
十五、宮衛令	考課令 十四
十六、軍防令	宮衛令 十六
	軍防令 十七

十七、衣服令 衣服令 十九  
 十八、儀制令 儀制令 十八  
 十九、鹵簿令 (ナシ)  
 二十、樂令 (ナシ)

二十一、公式令 公式令 二十一  
 二十二、田令 田令 九

二十三、賦役令 賦役令 十

二十四、倉庫令 倉庫令 二十二

二十五、厩牧令 厩牧令 二十三

二十六、関市令 関市令 二十七

二十七、医疾令 医疾令 二十四

二十八、捕亡令 捕亡令 二十八

二十九、仮寧令 仮寧令 二十五

三十、獄官令 獄令 二十九

三十一、營繕令 營繕令 二十

三十二、喪葬令 喪葬令 二十六

三十三、雑令 雑令 三十

# ◎僧尼令 七

以上、相對照するに、彼にありて我に無きは樂令、鹵簿令の二にして、二者名を同じくして相對して存するものは、

戸令 八	田令 九	賦役令 十	学令 十一
考課令 十四	禄令 十五	宮衛令 十六	軍防令 十七
儀制令 十八	衣服令 十九	營繕令 二十	公式令 二十一
倉庫令 二十二	厩牧令 二十三	医疾令 二十四	仮寧令 二十五
喪葬令 二十六	関市令 二十七	捕亡令 二十八	雑令 三十

の二十篇、(内容は多少の出入あり) 又その名目を変へて我が存するものは、  
 選叙令 十二(選舉令) 獄令 二十九(獄官令)  
 なり。而して、

## 官位令(官品令)

職員令(三師三公……寺監……衛府……州県……ヲ合併シテトセル姿)

後宮職員令

東宮職員令 家令……

は本邦特有の官位を示して特色を發揮せり。又、繼嗣令は唐の封爵令に比すべきものなれど、その家族制度の差甚しきと、封爵の制の無きとによりて著しき差あり。この繼嗣令は氏制制度の前の時代にては国民の□制□□たりしもの時勢ことなれどもなほ重きものありしなり。神祇令は唐の祠令に比当すべきものなれど、皇國の神祇と支那の鬼神とは甚だしく異なれば、同一に論ずべからず。僅に散斎、致斎のと、祭祀の申告との三・四条をとれるのみ。而して僧尼令に至りては全然彼の令に存せぬものにして本邦特有の令たるが、それも唐の道僧格によりたりといふことは佐藤氏の説く所なるが、その道僧格の全文果して伝はれるか否か明かならねど、この令を特に設けられたる趣旨は深き慮ありしこととも思はれた。ここに吾人は令によりて本邦の特別の制を知らむとするには先づ

## 僧尼令

## 繼嗣令

に注意を加へ、特に

## 神祇令

は深き考察を加ふべきを見るなり。

次に本邦の制度の特色は官職の制度を比較して見ることを要す。これには先づ、神祇官が太政官の上に位して存することなり。而して之は僧尼を管するものが、治部省管下の玄蕃寮たることと相對比して考へらるべきなり。玄蕃寮はその



頭の職掌として

掌仏寺、僧尼名籍、供齋、蕃客辞見・饗饗・送迎、及在京夷狄、監<sub>三</sub>当館舍<sub>二</sub>事。

とあり。これは小中村清矩の講義に曰はく、

此寮は唐朝の鴻臚寺に倣ひて設るものにて、外国の事を掌る。和名抄に保宇之万良比止乃豆加佐と訓めり。即ち法師客人の司なり。僧は外国より来れる仏法を奉ず。故に此寮にて管するなり。集解に玄者遠也蕃者藩也とあり。遠方の諸蕃を管するの義なり。又一説に、玄は墨染の衣の意にて僧尼、蕃は外国の義なりといへり。

と、蓋簪録に

本朝玄蕃寮、乃唐之鴻臚寺也。掌蕃客浮屠之事。唐時亦有崇玄署、掌<sub>二</sub>仏老事<sub>一</sub>。主客郎中、高宗時、改<sub>二</sub>云司蕃郎中<sub>一</sub>、掌<sub>二</sub>待遠人<sub>一</sub>。本朝命<sub>二</sub>鴻臚<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>玄蕃<sub>一</sub>。義蓋本<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>。

とあり。唐の鴻臚寺は九寺之一にしてその長官・鴻臚卿は

掌<sub>二</sub>賓客及凶儀之事<sub>一</sub>。領<sub>二</sub>典客・司儀二署<sub>一</sub>。

とあり。典客署は外夷の来朝在住せる者を司り、司儀署は我が喪儀司に似たるものなり。本邦の制は治部省の下に雅楽・玄蕃の二寮、諸陵・喪儀の二司を置かれたるが、この鴻臚寺のうちより司儀署の職を除きて僧尼の事を加へたるもの即ち玄蕃寮の職にして、これを即ち省にあたるものたりしを一格下したるは深き慮ありての事にして、僧尼令を新に設けられたると相對応する所ありと考へらる。

元来この玄蕃寮を管する治部省は唐の礼部に相当すといはる。唐六典の四礼部尚書の条に注して曰はく、

周之春官卿也。漢成帝置<sub>二</sub>尚書五人<sub>一</sub>、其四曰<sub>二</sub>客曹<sub>一</sub>、主<sub>二</sub>外国夷狄事<sub>一</sub>。光武分<sub>二</sub>三曹<sub>一</sub>、吏部曹主<sub>二</sub>選舉・齋祀事<sub>一</sub>。然則夷狄・齋祀、皆今礼部之職。東晋始置<sub>二</sub>祠部尚書<sub>一</sub>、常与右僕射通<sub>二</sub>職<sub>一</sub>、若右僕射闕、則以<sub>二</sub>祠部尚書<sub>一</sub>知<sub>二</sub>右事<sub>一</sub>。

宋・斎・梁・陳、皆号<sub>二</sub>祠部尚書<sub>一</sub>。後魏称<sub>二</sub>儀曹尚書<sub>一</sub>。北齊又為<sub>二</sub>祠部尚書<sub>一</sub>、掌<sub>二</sub>祠祭・医藥・死喪・贈賻等事<sub>一</sub>。後周依<sub>二</sub>周官<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>春官府大宗伯卿一人<sub>一</sub>。隋更為<sub>二</sub>礼部尚書<sub>一</sub>、皇朝因<sub>レ</sub>之。龍朔二年改為<sub>二</sub>司礼太常伯<sub>一</sub>、咸亨元年復為<sub>二</sub>礼部<sub>一</sub>。光宅元年為<sub>二</sub>春官尚書<sub>一</sub>、神龍元年復<sub>レ</sub>故。

と、而してその職掌の仔細は

礼部尚書・侍郎之職、掌<sub>二</sub>天下礼儀・祠祭・燕饗・貢舉之政令<sub>一</sub>。其属有<sub>レ</sub>四、一曰礼部、二曰祠部、三曰膳部、四曰主客。尚書・侍郎総<sub>二</sub>其職務<sub>一</sub>而奉<sub>二</sub>行其制命<sub>一</sub>。

とあり。治部省はその礼部と主客との二部に大略該当するものを掌るものにして、その主客のうちに僧尼の事を加へて玄蕃寮を設けられたりと見ゆ。

さてその祠部は唐六典によるに、

祠部郎中・員外郎 掌<sub>二</sub>祠祀・享祭・天文・漏刻・国忌・廟諱・卜筮・医藥・道仏之事<sub>一</sub>。

とあるが、本邦の祭祀は特に大事なるが、之を神祇官にて掌り、天文・漏刻・卜筮は中務省の陰陽寮に、国忌・廟諱は諸陵司に、医藥は宮内省の典藥寮にそれぞれ分ち、道仏之事といふ道教は我が国に無ければ之を措き、仏之事は玄蕃寮に管せしめたるなり。かくして神祇官を以て、あらゆる官庁の上におけることまことに顯著の取扱といふべし。

神祇官は一面祠部に当るやうなれど、又唐の太常寺にも当る点ありと見ゆ。太常寺の長官は太常卿は正三品にして、祠部郎中の従五品上なるよりは位地高し。その職掌は

掌<sub>二</sub>邦国礼樂・郊廟・社稷之事<sub>一</sub>、以八署分而理焉。一曰郊社、二曰太廟、三曰諸陵、四曰太案、五曰鼓吹、六曰太医、七曰太卜、八曰廩犧、云々

とあるが、その一二のみ神祇伯の職掌に似て、他の六は神祇官の掌る所に似ざるなり。かくの如く、祠部にも太常寺にも相似たる所ありてしかも全く異なる点あり。



り。これ即ち本邦の神祇が、支那の神と異なると共に本邦の神に対する道が、本邦特有のものなることを示すものといふべし。

さてこの神祇官はその長官を伯といへり。神祇伯の名は日本書紀繼体天皇紀と欽明天皇とに既に見えたれど、古語拾遺に

至<sub>三</sub>于難波長柄豊前朝(孝德)白鳳四年、以<sub>二</sub>小華下齋部首作賀斯<sub>一</sub>、拜<sub>二</sub>神官頭<sub>一</sub>今神祇伯也。

とあれば、神祇伯の字面はこれよりも後の制なるを前に通じて書けるならむ。持統天皇の御代には神祇官、神祇伯の名あれど、その八年三月の記事には

賜<sub>二</sub>神祇官頭至<sub>三</sub>祝部等<sub>一</sub>一百六十四人絶布<sub>上</sub>各有<sub>レ</sub>差。

とあれば、なほ未だ伯といはざりしならむ。かくて神祇伯の名は大寶の令に確立せしにあらざるか。

令の制度はその官司の差等によりて四等官にあつる文字を異にす。即ち

(省)	卿	輔	丞	録
(職)	大夫	亮	進	属
(寮)	頭	助	允	属
(司)	正	佑	令史	

とせるが、神祇官にては

伯	副	祐	史
---	---	---	---

とせり。かく長官を伯といふはこの官に限れしものなるが、これは恐らくは周官の春官大宗伯の名に因みて伯をその名とせしめられしにもあるべきなり。周礼に曰はく、

大宗伯之職、掌<sub>二</sub>建邦之天神・人鬼・地示之礼<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>佐<sub>レ</sub>王建<sub>二</sub>保邦国<sub>一</sub>、云々

とあり。これは、この官の特殊の地位を示さむが為のものなりと思はる。

なほ太政官に就きていはむに、これは伊藤長胤の説を見るを便なりとす。

#### 唐三省本朝太政官ノ事

本朝三公ノ職、唐官ニ配当スルトキハ、周ノ制并ニ唐ノ三公ヲ以テイヘバ、太師・太傅・太保ニ準ズ。孝謙帝ノ時改<sub>レ</sub>号コレヲ以テ称セラル、ナルベシ。唐ノ制ヲ以テイフトキハ、尚書省ハ太政官ニアタル。尚書省ノ長官・貳官ヲ尚書令・左僕射・右僕射トイフ。実ニ本朝三公ノ任ナリ。然ドモ唐ノ時ニハ尚書令ハ三省ノ長官ニテ宰相ノ任ナレドモ三公ノ員数ニアラズ。宰相ハ必僕射ヲ兼レドモ僕射ハ宰相ノ官ニアラズ。本朝ノ法ト同カラズ。大抵本朝、唐ニヨリテ官制ヲ立ラレタレドモ、此等ノ事ハ唐ノ法ヨリ簡ニシテ正シク、三公即宰相ノ任ナリ。名実相副フテ重複虚設ノ弊ナシ。又相国・丞相・冢宰等ノ名ハ古今ノ沿革、時ニヨリテ同カラザレドモ、何レモ首相ノ任ニシテ本朝ノ太政大臣ニ準ズベシ。

官制ノ事、通ジテ之ヲ考フルニ、古今ノ間年代オシウツリタルユヘニ、古ノ官權ナシトイヘドモ廢シガタク、新シキ官事ニアタリテ設ケ置カザレバカナハザルニヨリテ、カクノゴトク重複スルコトナリ。周漢ノ時ニハ三公天下ノ事ヲ取行フテ、コノ外ニ執柄ノ官職ナシ。後漢コノカタ、中書・門下・尚書等ノ權盛ナルニヨリテ、三公虚位トナル。唐ノ時ニ及テハ、三公虚位タルノミナラズ、三省モ又後漢南北ノ時ノゴトクニアラズ。是ニオイテ平章事・同三品等ノ職出来リテ政事ヲ掌ル。杜佑ノ奏議ニ云、旧名不<sub>レ</sub>廢新資日加ト。即コノ事ナリ。モシ夫本朝ノ制ハ、上世簡朴ノ後ヲ承テ、新ニ一王ノ大法ヲ立ラレ、唐ノ礼法ニヨリ本ヅキテ、兼テ古今ヲ參ヘ考フ。太政官ハ尚書省ニナズラヘ、其長官ヲスグニ三公トシテ、別ニ師・伝・保ノ名ナシ。中務省ハ中書省ニ準ズトイヘドモ、是ヲ八省ニ列シテ又門下省ヲ置カレズ。此唐ノ三省、本朝ニ在リテハタゞ一官ニテ事ヲ治ムルユエンナリ。

といへり。わが太政官は大体に於いて唐の尚書都省に当るものなり。支那にては省と名づくるはこの外に

門下省 (長官ハ侍中)

中書省 (長官ハ中書令)

秘書省 (長官ハ秘書監)

殿中省 (長官ハ殿中監)

の四省あれど、我にありてはその門下省は中書省と併せて中務省とし、秘書省に当る者は無く、殿中省は宮内省となし、その尚書都省に似たるものを太政官として諸官庁の上首におけるはまことに簡明にして要を得たりといふべし。かくて尚書都省の長官たる尚書令の上に

太師 太傅 太保 の三師

太尉 司徒 司空 の三公

ありて煩雜を極めたるに比すれば、わが太政官はまことに簡明にして統一する所明白なりといふべし。かくて尚書都省にてはその長官式官として

尚書令 左丞相 右丞相

をおきたるが、太政官にては

太政大臣 左大臣 右大臣

をおきたるが、その左右大臣は太政官の長官にして、尚書令に対して左右丞相の式官たると同じからず。かくして我が太政大臣は左右大臣の上に位して天皇を輔佐し奉れることは彼の尚書令と同じからず。太政大臣の職責に就いては職員令に

三師

三公

師 範一人 儀 三形四海

經 邦論道

變 理陰陽

无 其人 則闕

とあるが、これは唐令にその三師に

右三師、師範一人、儀刑四海

といひ、その三公に

右三公、經邦論道、變理陰陽、祭祀則太尉亞獻司徒奉俎、司空行掃除。

といひ、その次に

自三師以下、無其人則闕。

といへるを見れば、我が太政大臣は唐の三師三公六人の任を一人にて負担せるものなることは真に明かなりといふべし。而して、三公は一面は祭祀の官なり。即ちこれおのづから我が神祇伯の掌る所に一致する点あり。之を以て見れば、神祇伯は一面三公の職にも通ずる点あるものにして、祠部に当る所はその副以下の任にありと見らる。されど、神祇伯は位階に於いて八省の卿又彈正尹 (勅任) より下 (奏任) にあるを見れば、十分なりとはいひかねたり。

唐の制は中央の政府としては上の

尚書都省 門下省 中書省 秘書省 殿中省

の五省の外に

太常寺 光祿寺 衛尉寺 宗正寺 太僕寺 大理寺 鴻臚寺 司農寺 太府寺

の九寺ありて、それ〴〵職掌を異にして、又尚書省の下に

吏部 戸部 礼部 兵部 刑部 工部

の六曹ありてそれ〴〵尚書を以てその長官とせり。わが太政官の下にある八省はその「省」といふ官庁の名を上る五省の名よりとり、大体尚書省の六曹と中書省・殿中省と太府寺とを模本として八省とせるなり。即ちほゞ

中務省 (門下省ヲ含ム)

式部省 吏部

治部省 礼部 (太常卿)

民部省 戸部 (隋ニ民部トスルニヨル、李世民ノ名ヲサケテ戸部トセルナリ)

兵部省 兵部

刑部省 刑部

大蔵省 太府寺

宮内省 殿中省 (工部に当る部分、又司農寺に当る部分もあり)

の如き關係にして、その省の長官を卿といふことは九寺の長官を卿といへるをとれることは明かなり。かくてその官庁の名目も大体隋唐をとられたるものなれど、大蔵のみは本来古来の名目によりと思ゆ。即ちこの大蔵の名は雄略天皇の朝に起りしもの、由にて、その名が今もなほ用ゐられしことを見る。

以上の如く、唐の制と異なる点を仔細に精査せば、その異同を知ると共にその異同の生ずるに及べる事情を明かにすると共に、彼我の国情の差異を知り、併せて本部に於いて用ゐられたる制度の精神をも推察することを得べきなり。今上にあげたる神祇令と僧尼令との特別の事情を顧みつゝ、こゝにいふ所の神祇官と玄蕃寮との職掌とその官庁としての地位と更に神祇伯の事とを併せ考ふるときは、唐の制と甚しく異なる点にして、令の制定者の精神を略推察しうべく、これやがて本邦に於ける統治の要点にして内外の弁のまことに明白なるを推して知りうべきなり。

#### ⑨ 令の中に、古制を如何に保存せるか

令は唐の制をそのまゝ採れるにあらざることは既に大局について述べたるが、その唐の制と異なる所、これやがてこの令の特色として本邦古来の精神を保存して之を發揮せるものといふべし。

神祇令と神祇官の制とはまことに本邦の国体に根ざす所といふべし。按ずるに、大化元年七月に改新の政を行はむとして大夫と百伴造等に悦を以て民を使ふの路を歴く問はしめられたる時に、右大臣蘇我倉山田石川麻呂奏して曰はく、  
先以祭<sup>ヒ</sup>鎮<sup>メ</sup>テ神祇ヲ、然<sup>シ</sup>テ後<sup>ニ</sup>應<sup>ル</sup>議<sup>ニ</sup>政事<sup>一</sup>。

と。これ実に大化改新の根本精神にして、また我が國家統治の基底たり。これに基づきて起したる令そのものが、この精神に基づきたれば、上述の事実を呈するに至れるなり。

次になほ太政官の事に就きて少しくいはむ。その左大臣の職掌については

掌<sup>下</sup>統<sup>ニ</sup>理衆務<sup>一</sup>、掌<sup>ニ</sup>持綱目<sup>一</sup>、惣<sup>中</sup>判庶事<sup>上</sup>。彈正糾不<sup>レ</sup>当者、兼得<sup>レ</sup>彈之。  
とあり、右大臣も「掌同<sup>ニ</sup>左大臣<sup>一</sup>」とあり。これは唐の（尚書都省の）左右丞相の職に

掌<sup>下</sup>統<sup>ニ</sup>理衆務<sup>一</sup>、掌<sup>ニ</sup>持綱目<sup>一</sup>、総<sup>中</sup>判省事<sup>上</sup>。

とあると一致し、「省事」を「庶事」とせるの差に止まる。「彈正云々」の事は、彈正台は特別の任なれど、太政官に於いて一切の國政を統理する為の規定として必ず存すべき事なり。さてこの長官が左右並び存することは、唐の左右丞相並べるに等しきこととなるが、これは大化改新の際に、阿部内麻呂臣を左大臣とし、蘇我倉山田石川麻呂臣を右大臣とせられたることによりて既に存したることを以て、ここに明文とせられたるなり。さて右がの太政官の長官を丞相といはずして大臣の名を用ゐられたることは、既にいふ如く古来の制度をそのまゝに採用せられたるものなり。

抑も大臣の名の古きことは既にいへるが、これは本来は臣の姓、即ち皇別の姓のものが大政輔翼の重き地位に立ちたる時に賜はる称号にして、同様の地位に立つ者の神別、即ち連の姓なる時には大連といはれたるが、推古天皇の頃より蘇我氏ひとり榮えて大臣のみの世となりて、ここに大臣の名が輔弼の臣の称号の如くに固定したりしが故に、こゝに此の大臣を以て執政の最高官の名称として保存せられしならむ。さてここに考ふべきは、大臣の字面は旧に依られたれど、「オホオミ」の語はなほ旧来の精神に拘はる点あるべきによりて別の訓をなしたるならむ。後世これを「オホイマウチギミ」とよめるは、もと「オホキマヘツキミ」といへるものの訛にして、これは公卿大夫を「マヘツキミ」とよめるに基きて新に設けられたる語ならむ。

官省の名に於いて大蔵省の如きは頗る古きものなること既にいへるが、それに対して内蔵といふあり。これは今は宮内省に内蔵寮の名にて伝はれるが、令の制にては中務省の所管にして、今の制と同じからねど、その大体は似たる点ありと

す。これは大蔵が国家全般の倉庫の意なるに對して、宮廷に關しての倉庫の意なるが、その由来は古語拾遺によるに、履中天皇の朝に古来の齋藏と分ちて建てられたるものにして、それが雄略天皇の朝に至りて更に内藏と大藏とに分れたる由なり。なほこの外に兵部省の所管たる隼人司、宮内省の所管たる大炊寮・采女司の如きもみな、本邦固有の制度の保存せられたるによること著し。隼人・采女の事は今いはず。大炊寮はその職掌は

#### 諸国春米、雜穀分給、諸司食料事

を掌るにあるが、これの職掌は雜穀を諸司に分ち給すると、諸司に朝夕常食を給すると、月一度月糧を給するにあるが、大炊の名目を以て推すに、朝夕飯を大炊きて諸司の常食を給することを主眼とせりと見えたり。されば、この寮に八鼎ありたる由、天智天皇紀の十年に見えたるが、竹取物語に「おほいづかさのいひかしく屋のむねに云々」、大炊と書くはなほ正しくはあらずして大飯なるべきは政事要略に載せたる多米宿祢の本系帳に「召<sub>二</sub>氏人等<sub>一</sub>令<sub>二</sub>作<sub>二</sub>大飯<sub>一</sub>」とあるは、姓氏録に大炊寮御飯とあると同じなるべければなり。

以上、官省の名について少しく述べたる所なるが、ここに注意すべきは骨の代に伴造の率ゐたる諸の伴部が如何に職の代にはなりたるかといふことなり。即ち神郡卜部が神祇官の所管に存し、解部が治部省と刑部省とに存し、土部が諸陵寮に存し、物部が囚獄司・左右衛門府に存し、蔵部が大蔵省に存し、漆部が漆部司に存し、大炊部が大炊寮に存し、殿部が主殿寮に存し、掃部が掃部寮・内掃部司に存し、膳部が大膳寮と内膳司とに存し、酒部が造酒司に存し、鍛部が鍛冶司に存し、泥部(ハツカシベ)が土工司に存し、采部が采女司に存し、水部が主水司に存し、門部が左右衛門府に存したるなど、皆古の伴造が撰取せられたることを告ぐるものなり。又内藏寮・大蔵省に属する百濟手部・狛部は古の伴部の名称なるべく、木工寮に属する工部、画工司に属する画部は古の名を踏襲せしものなるべく、造兵司・典鑄司に属する雜工戸は集解によるに古の伴部の多くの残り存せ

しを見るべし。

解部の職掌は治部省にては

#### 掌<sub>レ</sub>鞠<sub>二</sub>問譜<sub>一</sub>第争訟<sub>一</sub>

刑部省にては

#### 掌<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>窮争訟<sub>一</sub>

と記せるが、これは古昔より裁判にあたりし氏族たりしが故也。又物部は囚獄司にては

#### 掌<sub>下</sub>主<sub>二</sub>当罪人決罰<sub>一</sub>事<sub>上</sub>

とあり、衛門府にては

#### 謂此名為<sub>二</sub>内物部<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>決<sub>二</sub>罪人<sub>一</sub>特置<sub>二</sub>此府<sub>一</sub>、当<sub>二</sub>決罰時<sub>一</sub>、皆帶<sub>二</sub>刀劍<sub>一</sub>

とあるなど、これを逆にして、古の解部、物部などの職務を推定しうべし。ここに昔刑は兵刑の一途にてありしさまの名残を見る。而して、これらの名目よりして今の官名に警部などいふものの存する由来を見るべし。かくこれら伴部は皆いづれの官省にても極めて卑き地位におかれたるを見て、これらが、かの臣連の地位の低下せると同じ精神たることをば略推して知るべし。なほこれら古の伴部のことは職員令以外にても推知しらることあり。例へば喪葬令に見ゆる遊部の如きこれなり。

以上は主として官職の名にあらはれたるものをあげて論じたるなるが、その他の方面にても唐令と比較して、それに存せずして此に存するものあるときに、之を精しく考ふることにより、我が令の特色又は令に含める精神を知りうることにあらむ。例へば、職員令太政官の少納言の任を見るに、

少納言三人 掌<sub>下</sub>奏<sub>二</sub>宜小事<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>進鈴印伝符<sub>一</sub>、進<sub>二</sub>付飛駅函鈴<sub>一</sub>、兼監<sub>中</sub>官印<sub>上</sub>。

其少納言、在<sub>二</sub>侍從員内<sub>一</sub>。

とあり、中務省の侍從を見るに、

侍從八人 掌<sub>二</sub>常侍<sub>一</sub>、規諫、拾遺補<sub>レ</sub>闕



とあり。この少納言は唐の門下省の給事中に当たるといひ、侍従は同じく門下省の散騎常侍又は補闕又は拾遺に当たるといへり。然るに、我が国にては少納言は太政官に属し、侍従は中務省に属せり。これは一面より見れば、府中と宮中とを分ちたるにて頗る厳密なる用意に出でたりと見えたり。然るに、その少納言三人は又侍従八人のうちより兼任するものとせり。この事は宮中と府中とを混同するが如き嫌ありといふ人あり。されど、これは深く思はざるの甚しきなり。謹んで按ずるに、至尊は造次顛沛、これ国家の精神中枢にてあらせらるゝが故に、国家の大事は時々刻々に之を処理あらせらるべし。然るが故に側近奉仕のものは必ずおのづからその国家の機密に触れざるを得ず。然れども、その任にあらずしてその枢機に触るはこれ大権の発動を瀆すものとなる。ここにその侍従のうち三人を限り特に枢機に干与すべき任を与へて之を太政官の判官としたるなり。ここに於いて宮中と府中との関係公明となりて濫なることなからむ□□□□ことを冀ふによりて、本朝の制かくはせられたるなり。今之を有腦に於ける血脈の有様にたとへむか、その血脈の入る所と出づる所とは末に至れば極めて明白なれど、その中枢部にありては入ると出づるとは真に一髪の差に止まるべく、即ち一の毛細管にして二者の用を兼ねあらはすことあらむ。かくの如き作用を国家の中枢部に於いて行ふもの即ち少納言の任なり。惟へば、この制度の如き、極めて用意周到に出でたること著しいといふべし。

令は以上の如く、古来の制も多少は伝へたりといへども之を骨の代のさまに比べれば、著しき変革を行ひたるものとして世の有様全く面目を一新したる如きことになれりと思はる。されど元来その国情の甚しく異なる国の制をとりたるものなれば、その条文のうちには実際に行ひがたきものも或は存し、又民情に通ぜぬものも存したりしならむか、次第に行はれざる部分多くなり行きて終に所謂名の代にはなれるなり。

#### ④ 令の制のくづれ行くさま

大宝の令出で養老に改められてより、今は略一定して一千二百年許これを動かされざりき。然れども、時世の変遷は自然にその変更を促してやまず。官職のみに就きて見ても、八省に附属せる官署の他に併せられ又は廃せらるゝもの次第に生じ、又それらの官署に附属せる職員員の減員せられたるものも少からず、而して一方には、所謂令外官として内大臣・中納言・参議などの大臣の新に加はれるものあり。平安朝に入れば、弘仁に蔵人所出でて詔勅を伝宣する事を行ひ、少納言・侍従等は名のみにして実を失ふに至り、同じ御代に檢非違使を置かれて、彈正台・刑部省の権之にうつりぬ。この檢非違使は、主として衛門兵衛の官人の兼務せるものなるが、これも古兵刑一にして警察の事も兵士の任たりし姿にもどりしなり。更に清和天皇の時に摂政をおき、宇多天皇の時関白をおかれて、太政大臣は空名となり、大臣は成を仰ぐこととなりぬ。かくして次第に令制はその実を失ひ、威力も亦衰へ行くこととなれり。かくていつしか藤原氏の勢力強大となりて、天下の大勢は藤原氏の力にて動くが如きさまになりぬ。かくて代は藤原氏の力のまゝに動くこととなりて、職の代のさま又行きづまれり。ここに藤原氏を制せんが為に院政を興せられたるが、この院政は、藤原氏の権は抑圧せられたると共に、実権を皇室に回復せしめられたるさまに見えたり。されども、これよりして在位の天皇の大権が軽んぜらるゝこととなり、国家の様相著しく変化したり。かくの如きことはまことに遺憾なることといふべし。

更に令の制を顧みるに、こゝに一の大なる弱点の存したるを見る。それは、国家常備の兵制の確立せぬことなり。骨の代には兵農の別なくして、天下の万姓はすべて一面に於いて軍隊として活動するを原則としたり。もとより大伴氏・物部氏等は禁衛の将として平素兵を掌るを以てその任としたりしが故に、これのみは武を専らとしたりといへども、これのみが武人たるにはあらざりしなり。かくて、事ある時は天皇・皇族、自ら元帥となりて膺懲したまふ事にてありしなり。然る



に、令の制を見るに、禁衛の軍兵の規程はあり、又兵部省あり、軍団の制あり、徴兵の制ありといへども、京にも国にも十分の兵力を常備せられたりとは見えず。天武天皇の朝に諸国に詔して陣法を習はしめ、又文武官は努めて兵を用ゐる馬に騎ることを習はしめ、其兵を充足せしめられたり。されど、古の文武一体兵衆一致の制、おのづからすたれて、国家の武備頗る弛緩せるは、文弱に流れたる唐制の余弊なるべし。ここに検非違使を置かるゝに及びては、警察、刑罰の権は令の外に生じて天下の大変をきざし、これより諸国にも検非違使をおかれたり。これら地方の検非違使が後の押領使・守護職の源となるなり。さてその後、諸国の兵士・衛府の官、いづれも脆弱にして物の用に立たざるに至りしことは、三代格・三代実録等を知るべし。此に於いては禁中には滝口の武者、東宮には帶刀、院中には北面の武士を置かれ、源平の武士を以て宿衛に充てられたり。藤原氏の如きも亦、源氏の武者を引きてその仇牙としたり。ここに至りて国家の武力はおのづから武門の手に握られ、朝廷は兵馬の権を失はれたり。

源平二氏が武門の頭領と仰がるゝに至りしことは、この両氏より代々武勇の士出でたるに因ることはいふまでも無し。されど、武勇の名ありしものは、他の氏にも少からず。古くは坂上田村麿あり、藤原利仁あり、又、源平の興隆の際にも田原藤太秀郷、藤原保昌等その人に乏しからず。然るに、それらが、武門の頭領とならずして源平二氏に衆望の帰せしことは、この二氏が単に武勇を以て聞えたる名門たるに止らずして、実にそれが近き頃の皇別家たりしが故なるべし。元來武力の源は天皇に存すべきものなるに、その當時の世のさまは、それを実現し得ざる状態なり。しかも諸国の武士はその武力の統制あらむことを冀してやまず、ここに部分的におのづから統制せられて、幾団かの武力生じたれど、それらは多く割拠的のものたりしが、それらが次第に統制を冀ひてやまず、次第に統一の運に向ひたるが、それらの事が無意識的に行はれて、いつしか源平二氏がそれらの統頭と仰がるゝこととなりしならむ。これ源氏平家といふ武門の世に現出せし事

情ならむが、これは一面より見れば、国家の武力は一日も廃すべからざるものとする点より自然に生じ、又その武力は皇室によりて統括せらるべきものとする点よりして、誤解ながら源平二氏をその首領と仰ぐに至りしならむ。これ皇室と一般国民との中間に藤原氏といふ一の大なる黒雲ありて、天日の光を国民をして仰がしめざる様に遮りたれば、ここに国民の間にその統領を求め、皇室に最も近き血統をして源平二氏を仰ぎたる結果なるべし。されど、源平二家に別れては、未だ真の統一を望むべからず。かくて源平二家のいづれかに統一せられざるべからず。ここに二家の争となりてあらはれ、その結果平家亡びて源氏が武門を統一して、こゝに所謂名の代の出現せしなり。

大勢三転考にいふ名の代とは、武門執政の時代のことをさせり。この武門の興起は上述の如くなれば、これは朝廷の企てられたる改革にあらざりしが故に、朝廷にては依然として令を以て世を知しめす規準とせられ、ここに千二百有余年間、令は形式上、国家統治の上に永く行はれて近頃及びたることは既にいへり。

惟ふに国家の生活は古今を通じて存すべく、濫りに変更すべからざる恒久の点と、時世に即して生々活動一日も止まざるを要する点とあるべし。即ち一は骨格に該当する部分にして、一はその活動に属する部分なり。もとより骨格とても徐々に生長変化しつゝあるものなれど、大体に於いて著しき變動をば呈せざなり。令はまさにこの骨格を示せる部分に該当すといふべし。即ち、吾人は、令そのものの研究と、令以前のものと、令以来のことを、令を中心として照してわが国家の精神わが国家の活力といふものを視ることを得べし。

(やまだ よしお・神宮皇學館大學學長(當時))

## 【補記】

大平 和典

本原稿の著者山田孝雄は、明治六年（一八七三）生まれ、昭和三十三年（一九五八）年、八十五歳で逝去された。氏は、中学校教員、文部省国語調査委員会補助委員、日本大学講師などを経て、大正十四年（一九二五）東北帝国大学講師、昭和二年同教授、昭和十五年に神宮皇學館大學学長。昭和二十年八月に国史編修院長に転任。戦後、文化功労者、文化勲章受章。本原稿は、神宮皇學館大學学長在任中に、学生生徒に対する特別講義のため準備されたものである。

昭和十八年十月、「在学徴集延期臨時特例」（勅令第七五五号）の公布により、兵役法第四十一条第四項の規定に認められていた文科系大学・専門学校の学生生徒に対する徴兵猶予が停止され、学徒出陣を迎える。神宮皇學館大學においては、一五一名（昭和十八年十二月入営（入団）学生生徒名簿<sup>(2)</sup>）では一五〇名）がこの年十二月に入営・入団することとなり、十一月二十日には出陣学徒壮行式が催された<sup>(3)</sup>。壮行式に先立ち、同月十五日・十六日の両日には山田孝雄学長より出陣学徒に対して「令を講ずることの総説」と題する特別講義があり、学生達を見送った後には教員による「令」の共同研究も行われている<sup>(4)</sup>。

このうち、山田学長による特別講義は、十五日は午前十時から二時間、翌十六日は正午から、大学の講堂にて行われた。『伊勢新聞』昭和十八年十一月十五日付夕刊には、

苛烈決戦下烈々たる尽忠の赤心に燃えあがる神宮皇學館大學出陣学徒の壮行式は二十日午前十時三十分から大講堂で挙行されるがこれに先だち十五日午前十時から大学部、同予科、専門部の全学生生徒を大講堂に集めて出陣学徒に対する最後の饒として学長山田孝雄博士から特別講義があり『令』の研究および内容について正午まで大講義を行つた

とあり、また聴講した鷲尾（正井）光張氏の日記に、

十五日 山田に帰る 十時 学長先生の講義「令を講ずることの総説」約一時間 大

令を講ずる総説（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）（山田）

勢三転考を紹介さる

十六日 学長 饒別の講義終了

同じく上杉千郷氏の日記に、

十一月十五日（中略）学長最後のはなむけとして吾々に特別講義をして下さる事になった。誠にかたじけない限りである「令を講ずることの総説」という題にて吾々が戦場に向い行も学問とはどうして研究するものであるかを知って我々出陣に酒肴にでもしてくれとの事でした。

熱心に迫力あるあの音声で堂々と講じになる学長の態度、講義はむつかしいが、それでも真剣に聞き入る。二時間にわたる間の講義、意義深く感激深く聞く。

十一月十六日 昨日に引きつづいて学長の講義あり。今吾々征く者には直接関係なき如くに見えるが、此の学長の講義の底に流るゝものは真実なる学びを示されたものである。此れが皇学である。いたずらに時局便乗の講義でなく、学者の歩む道を説かれた学長の心境こそ実に尊いものがある。（後略）

と記されている。平成七年の戦歿学徒慰霊祭において西宮一民学長の奏上された祝詞には、次のようにある。

（前略）山田孝雄学長の曰はく 汝達出で立ちなば 今ひとたび学問すること叶ふまじ されば最後の講義をせむとて 養老令神祇官条を講ぜられき。全学の教官・学生寂として 唯ベンを走らす音のみ聞ゆ。（後略）

さて、ここに翻刻するのは、富山市立図書館山田孝雄文庫に所蔵されるこの山田孝雄学長の特別講義「令を講ずることの総説」の自筆原稿（整理番号091）である。その書誌情報については同館のホームページに次の通り記載されている。

未刊稿本 自筆 1冊目は400字詰原稿用紙に毛筆書き 2冊目は東京文房堂製400字詰原稿用紙にペン書き バインダー綴 「山田孝雄博士著作遺墨展」短冊に「原稿 二四 令を講ずる総説」とあり 表題紙には赤字ペン書きで「令の総説」とあり 冒頭に「十八年十一月十五日午前六時／十一月十六日十二時」とあり 目次：

1. 緒言 2. 骨の代の有様とその骨の制の廢絶 3. 官職の制の起りて定まるに至るまでの事情 4. 令の由來 5. 現存の令の事情 6. 令の講究 7. 令に就いての研究の要領 8. 令の制のくづれ行くさま

内容は、表題の示すごとく「令」研究の総説である。伊達千広『大勢三転考』の紹介から始まるが、本論には、「令の講究」の項に、三浦周行・瀧川政次郎編『令集解釈義』、荷田春満『令義解劄記』、荷田在満『令三弁』、平沢元愷『令解会説』、稲葉通邦・河村秀根・石原正明・神村正鄰『講令備考』、新井祐登（白蛾）『令義解講録』、壺井義知『令義解愚注草稿』、藺田守良『新釈令義解』、近藤芳樹『標注令義解』、といった国学者の注釈的研究等が研究史として掲げられている他に、直接に引用されているものには次のような著がある（引用順）。

- ・伊達千広『大勢三転考』
- ・小中村義象『大政三遷史』
- ・伊藤長胤『制度通』
- ・尾崎雅嘉『群書一覽』
- ・荷田春満『創国学校啓』
- ・佐藤誠実『律令考』
- ・仁井田陞『唐令拾遺』
- ・小中村清矩『官職制度沿革史』
- ・伊藤長胤『盍簪録』

本特別講義は、学徒出陣を前にした神宮皇學館大學学生生徒に対して行われたもので、神宮皇學館大學史の一頁を飾る極めて貴重な資料である。加えて、山田孝雄博士の律令学を考えるに際しても有用と思われる、ここに翻刻し紹介する次第である。

今回翻刻にあたっては、通読の便を図り、次のような編集を施した。

一、仮名遣いは原文のまま歴史的仮名遣いとするが、漢字は常用漢字に改めた。

一、濁点や句読点・返り点を適宜補い、その他体裁を整えた箇所がある。  
一、史資料引用において脱字が疑われる箇所は□で補い、誤字と思われる箇所はその右傍に（ ）で記した。

一、書き直しをしている箇所などについては最終的に確定した文章を採用することを原則とした。六十七丁と六十八丁の間に存する原稿二丁（八、令の中唐の制を如何に採用せるか）のうち、「神祇官は一面祠部に当る」より「本邦特有のものなることを示すものといふべし」まで）についても、注記することなく該当箇所に挿入している。判読できなかった文字については□であらわした。

## 註

- (一)「昭和十八年十二月入宮（入団）学生生徒名簿」（皇學館大學所蔵。『皇學館大學百三十年史』資料篇二、学校法人皇學館、平成二十五年三月、に所収）。
- (二)「出陣学徒壮行式」（『館友』四二五、昭和十八年十月。前掲『皇學館大學百三十年史』資料篇二に所収）に、式次第、大学長訓辞、在学生総代壮行辞、出陣学徒総代答辞が掲載される。
- (三)渡辺寛先生「神宮皇學館大學における「令」の共同研究——『令共同研究會記録』（一）——」（『皇學館大學史料編纂所報 史料』一二四、平成五年四月）参照。また、これらの学問的意義についても、渡辺先生が別に詳述される予定とかがうので、ここでは特に触れない。令共同研究会記録の全文の翻刻は、荊木美行先生「『令義解』序の研究（一）」（四）」（『皇學館大學文学部紀要』四二―四五、平成十五年十二月～平成十九年三月。のちに『令義解の受容と研究』汲古書院、平成二十二年二月、に再録）。
- (四)正井光張氏『倉田山日記抄 神宮皇學館大學発足から廃学までの六年』（正井光張君遺稿集編集世話人、昭和五十年七月）。同氏は当時学部二年、翌十九年六月召集、中部第五四部隊入隊。

(五) 上杉千郷氏『学生日記―学徒出陣前の学生生活―』(私家版、平成十八年二月)。  
同氏は当時附属専門部二年、この時召集、大竹海兵团入団。

(六) 『皇學館百二十周年記念誌』(学校法人皇學館、平成十四年四月)に掲載。西宮氏は、昭和十八年当時予科二年、十九年十月学部入学、同月豊橋第一陸軍予備士官学校入学。

(七) 富山市立図書館ホームページ「電子図書館」(<http://www.library.toyama.toyama.jp/densin>)。同館では、所蔵する山田孝雄文庫の自筆原稿を順次デジタル化してホームページ上での画像公開を進めておられ、『令共同研究会記録』(同館では資料名を「令の研究」として登録)については各冊の表紙等の画像が掲載されている。「令を講ずる総説」自筆原稿は平成二十七年十二月現在、画像等掲載されていないが、いずれその全部または一部の画像がインターネット上より閲覧できるようになることを期待する。

## 付記

末筆ながら、翻刻をお許しいただきました富山市立図書館に感謝申し上げます。

(おおひら かずのり・皇學館大学研究開発推進センター准教授)



# Overview of the Ryo

YAMADA Yoshio

This paper is a lecture manuscript of the Jingu-Kogakkan college president Yoshio Yamada. This lecture was made upon the departure of students for the war front in 1938. The content is an overview of the Ryo(Ordinance).